

## VI 第37次調査の記録

－元岡古墳群O群－

## 1 調査に至る経緯

九州大学移転に伴う西区大字元岡、桑原地区の埋蔵文化財調査は平成7年度（1995年度）末から開始された。275ヘクタールの移転用地の全域を対象に福岡市教育委員会が踏査、試掘を行い、遺跡が認められた造成予定地について発掘調査を行うという手順がとられた。平成15年度までにすでに38次に及ぶ発掘調査が実施され、一部遺跡保存のため造成計画が変更された地区もあったが、福岡市土地開発公社の造成予定地については平成16年度では調査終了のめどがつくような状況まで至っている。

当初の山稜部の踏査は、ほとんど樹木が茂ったままの状態で古墳や山城の痕跡を探っており、場所によっては立ち入りが困難で、古墳などの見おとしや誤認があった。これを防ぐため造成工事に伴う伐採時に、山間の尾根線を中心に改めて踏査、試掘を行っている。今回報告する第37次調査も似たような状況から、発掘調査に至ったものである。

第29次調査の開始に先立ち伐採が行われたが、調査地点の北側に延びる尾根は、それまでの踏査で古墳が確認されていなかったためこの区域からはさされていていた。樹木が付近一面に生い茂り、古墳の有無は定かではなかったが、石ヶ原古墳の北にとりつ尾根でもあり、委託者である福岡市土地開発公社に伐採を依頼した。平成14年度末に伐採が行われ、元岡石ヶ原古墳の調査（第35次調査）時に踏査したところ、古墳の石室らしき石材が尾根部に露出しているのを確認した。そこで、元岡石ヶ原古墳調査終了後の平成15年10月20日に尾根部を中心に試掘調査を実施し、南から北にならぶいすれも横穴式石室の天井部を失った4基の古墳を検出した。委託者と協議の上引き続き本調査に切り替えることとした。調査にあたってはこの古墳群を新たに元岡古墳群O群と命名し、4基の古墳は南から1～4号墳とした。調査は平成16年2月26日までかかり、古墳4基のほか、土坑1基、焼土坑1基を確認した。古墳4基を含めた発掘総面積は461m<sup>2</sup>であった。

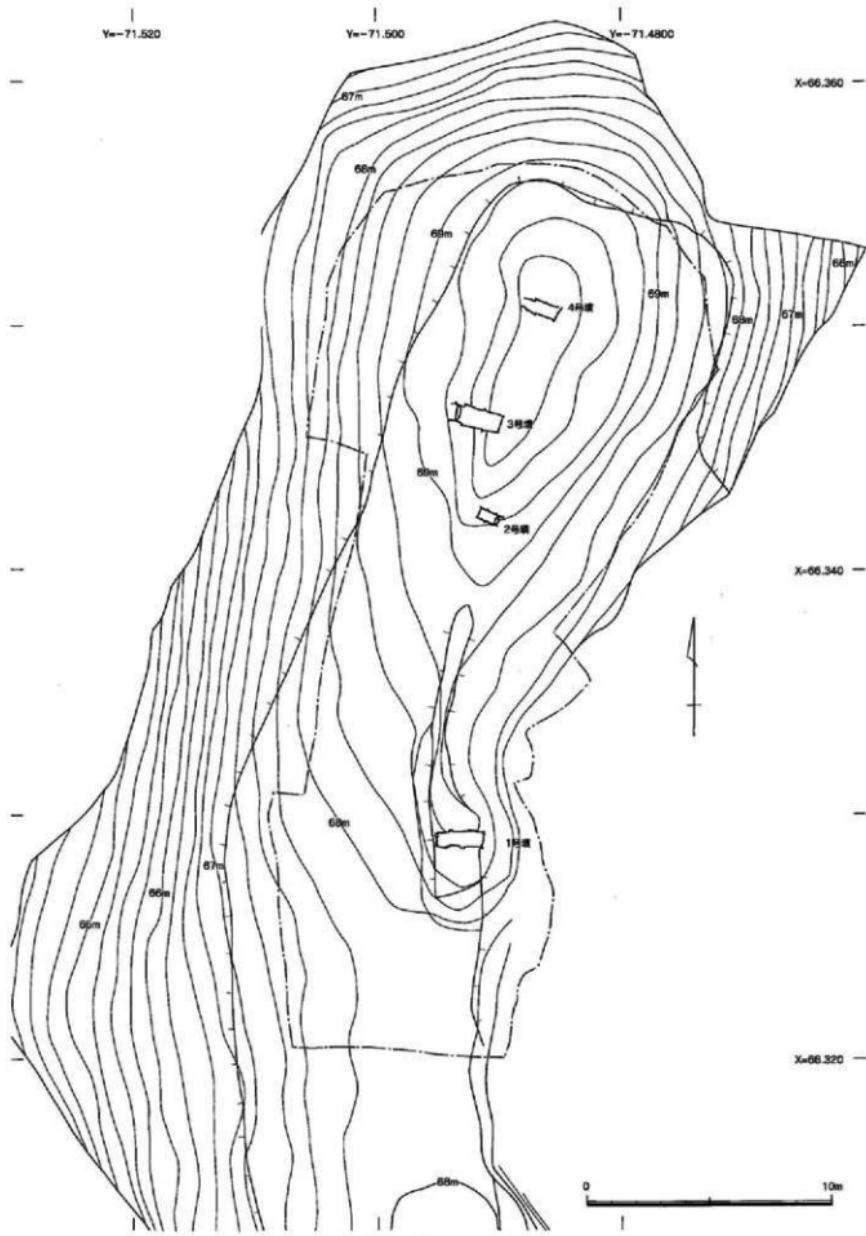
発掘調査は文化財部大規模事業等担当課（課長二宮忠司）が行い、主査の濱石哲也が現場を担当した。調査にあたっては同課の菅波正人、屋山洋、上角智希、調査員の水崎るり、現場では廣瀬公則さんをはじめとする多くの作業員の方々の協力を得た。また整理、報告書作成にあたっては、出土金属器の処理および原稿執筆で福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎、出土遺物の実測で調査員の林田憲三の助力を得た。

## 2 O群の位置と環境

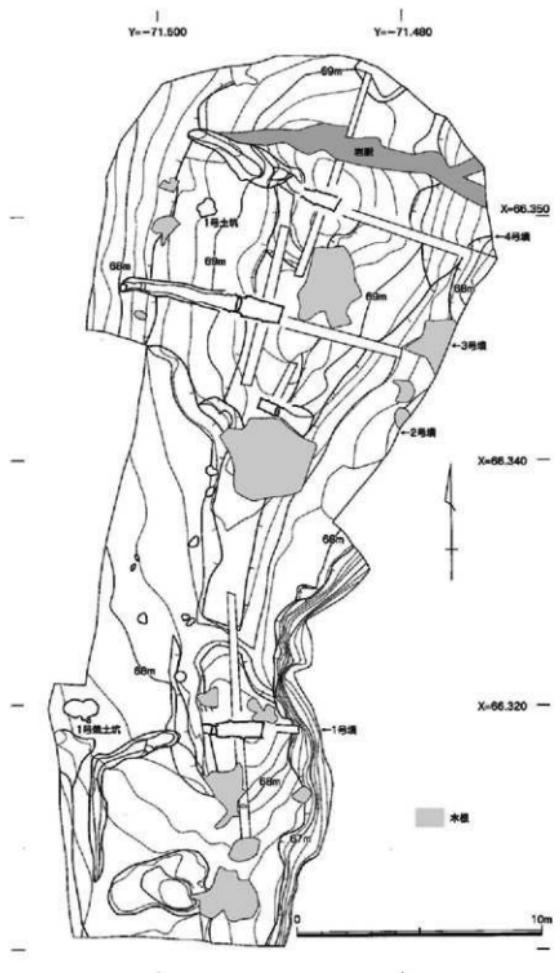
九州大学移転用地は、志摩半島東南部の西区元岡、桑原地区を中心とした東西3km、南北2kmの範囲に広がる。この用地の東南部にそびえるのが水崎山（標高94.5m）で、この山の裾部、また山中で古墳時代から古代を中心とした遺跡、古墳群が確認され、数次にわたる発掘調査（註）が実施されている。第37次調査地点もこの山中にあり、行政的には福岡市西区大字元岡字石ヶ原あたり。

水崎山は北および西北方向にその尾根線を延ばし、西北方向の尾根最高部（標高75m）には元岡石ヶ原古墳（全長53mの前方後円墳、第35次調査）が築造され、その南側が元岡古墳群N群（第29次調査）、西側は桑原古墳群A群（第25次調査）が築かれた尾根線となる。

元岡石ヶ原古墳から北に約60m延びる尾根上に今回調査した元岡古墳群O群がある。この尾根は北端が標高69.75mと最も高く、その北側は鞍部となり、さらに北側の尾根上には金庫古墳（全長23.8mの前方後円墳）が築造されている。尾根の南側は緩やかに約1mほどさがり元岡石ヶ原古墳の後円部北側にとりつく。尾根の西側は緩やかに傾斜し、東側は大きく削られ、尾根上部は幅5～7mで残存する。この尾根線上を子細にみると、尾根の標高は北から南側に低くなるが、北端部に標高69.75mの、またその南側に標高69.00mの高まりがあり、前者に2～4号墳、後者に単独で1号墳が築か



第121図 元岡古墳群O群地形測量図（縮尺 1/200）



第122図 元岡古墳群O群墳丘遺存測量図（縮尺1/200）

の検出はなかった。

今回の調査で検出した古墳はいずれも小横穴石室を埋葬施設とするものである。その概要は以下のとおりである。

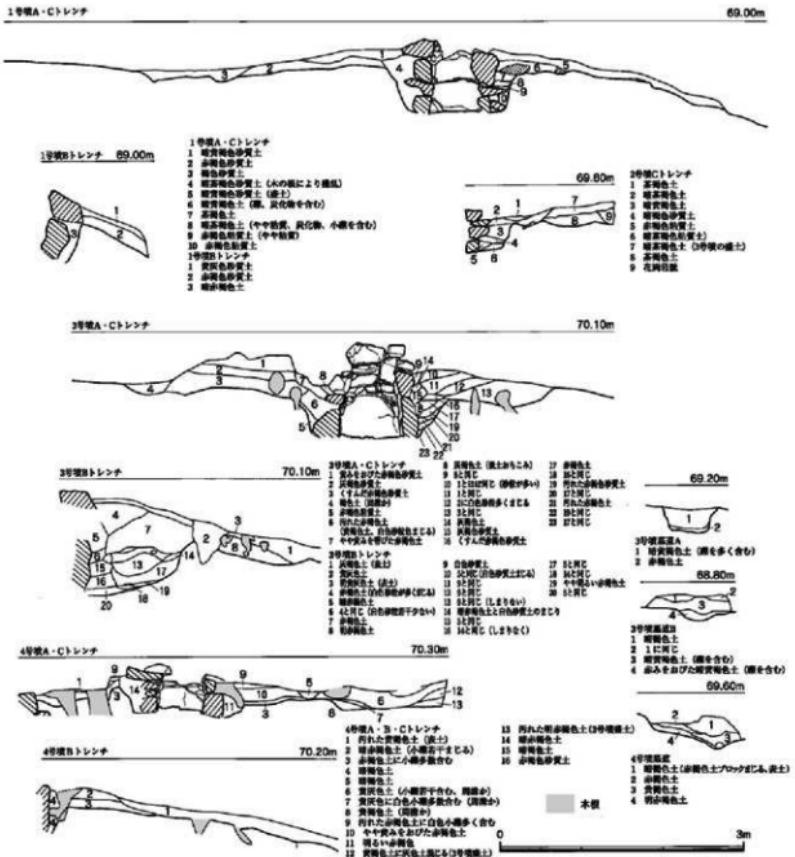
1号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳であるが、石室は天井部を失い、墳丘もほとんど残存しない。玄室床面から玉類が出土した。

れてることがわかる。

(注) 平成15年度までに第18K、20K、22K、24K、25K、26K、29K、35K、36K、38K調査が行われている。

### 3 調査の記録

第37次調査地点はこれまでの確認調査で古墳の所在が知られていなかった場所である。伐採後も尾根上に切り株が残った状況であり、とくに高まりなどもなく、古墳があるようみえなかつた。ただ、花崗岩の小転石が数ヶ所にあり、この部分を中心に入力で試掘を行つたところ、最終的に4基の古墳石室を検出した。先述したようにただちに本調査に切り替え、古墳群を中心とした尾根上面の表土剥ぎを人力で行った。尾根上は10~20cmの表土を剥ぐとすぐ花崗岩風化土の地山とななり、北側では岩脈が露出して東西に走っていた。石室の周囲には木の根が深くくい込んでおり、調査にあたってはこの除去に時間をとられた。4基の古墳は並行して掘り進め、その記録をはかった。なお、元岡石ヶ原古墳群部からO群との間約25mの尾根線についてもトレンチを設けたが、遺構



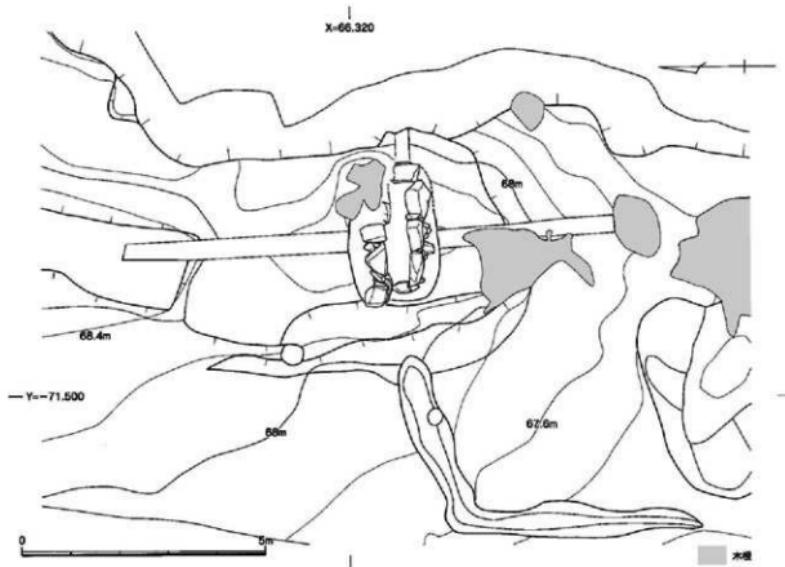
第123図 1～4号墳トレンチ土層図（縮尺1/60）

2号墳 小型横穴式石室をもつ古墳。石室の残りはよいが、墳丘は残存せず、また出土遺物もなかった。

3号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳。石室は天井部を失い、墳丘もその下部がかろうじて残存する程度である。玄室から須恵器、玉類、耳環、馬具などが出土した。

4号墳 横穴式石室を内部主体とする円墳。石室は上半部から天井部を失い、墳丘は大きく削平されている。出土遺物はない。

なお紙幅の都合上、各古墳のトレンチ土層図は第123図にまとめた。



第124図 1号墳地山整形測量図（縮尺1/100）

### 1) O-1号墳（第122~126図、図版60・61・66）

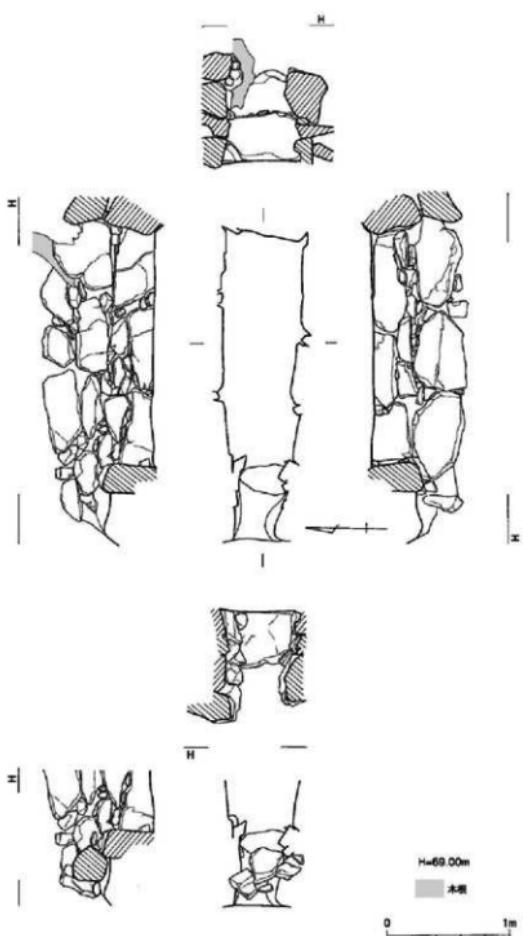
#### 1) 位置と現状

古墳群のなかで最も南に所在する古墳である。南側の元岡石ヶ原古墳とは約25m、また北の2号墳とは10mほど離れる。尾根南側の高まりに単独で築かれた古墳であるが、上部は削平されて平坦になり、また南側は一段切り下げられ、東側は土取りによるとみられる崖面となる。高まりの頂部から南側の緩やかな斜面には大木が根を張り、古墳の存在はほとんどかがうことができなかった。南側の段落ちに花崗岩の転石らしきものがあったので、そこを中心に掘り下げたところ、西側に開口する横穴式石室を確認することができた。石室基底面の標高は67.90mで、O群のなかでは最も低い。

#### （2）墳丘

地山整形（第124図） 石室は尾根等高線に直交して配置される。先述したように旧状をほとんどとどめないが、残存した部分から判断すると、尾根の高まりを南北幅5m前後削りとて平坦にし、その中央に石室掘り方をもうけたものとみられる。また北側からの尾根線を幅1.5mの溝で切り離す。ただこれも大きく改変されており、周溝状になるものは判断できない。

墳丘（第122図） 墳丘は平坦に整形した地山を基底とし、盛土には地山の赤褐色砂質土を用いるが、全体に削平され各トレンチとも基底から1~2層しか残存しない。Aトレンチをみると、II区の基底面に厚さ10cmほどの盛土をほぼ水平に行い、そこから石室の掘り方を掘削する。石室の裏込めの土層は、木の根で明確さを欠くが、栗石は使用していないようである。側壁三段目まで裏込めを充填した後、四段目の石を積み、裾部近くから石室裏込め上まで2層目の盛土を行う。CトレンチのIII区では三段目までの裏込めを粘質土で埋めた上に、墳頂までの1層の盛土を行う。II、IV区にはほとんど



第125図 1号墳石室および閉塞実測図 (縮尺 1/40)

にある。掘り方基底面は平坦で、石室腰石、樋石はこの基底面をやや掘り込んで安定をはかっている。

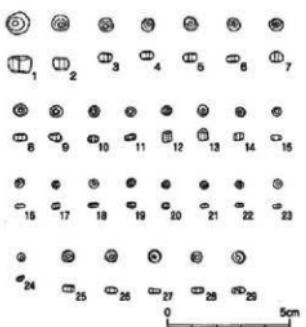
玄室 奥幅0.65m、前幅0.50m、左壁長1.95m、右壁長1.90mの奥壁側がやや広い長方形の平面形を呈する。奥壁は底面から二段、下段は幅80cm、高さ40cmの腰石を置き、その上にやや小振りの割石をのせる。奥壁の底面から残存高は75cm。両側壁はそれぞれ幅60~70cmの3石の腰石からなる。左壁は底面から高さ90cm前後残存し、壁面は奥壁側が二段、ほかは四段が残存する。奥壁側の腰石はほかの倍近く高さをもち、またその上の石も大振りであるため、これにあわせるようにはかの2石の腰石

盛土は残らない。石室中軸から北側の切り離し溝端までが2.7m、Bトレンチの南側の盛土裾までが3.3m、また等高線の流れからみて、径6m前後の円墳であったものと考えられる。

(3) 横穴式石室 (第124・125図)

1号墳の埋葬施設は主軸をN-88.5°-Eにとり、西側斜面に開口する单室の横穴式石室である。天井部はすでに失われていたものの、腰石から上二、三段が残存しており、平面形態、石積み状況の把握は比較的容易であった。石室平面は長方形の玄室に、短い羨道がついたもので、樋石と羨道の構造がO群のほかの3基と大きく異なる。石室の全長は左壁で2.20m、右壁で2.10mと小型のものである。羨道端は段落ちとなるが、その先にL字形に曲がる墓道が浅く残る。石室各部を構成する石材はすべて花崗岩である。

石室掘り方 石室は、地山整形で造った平坦面のほか中央を切りくぼめた長さ2.7m、幅1.7mの椭円形状の掘り方内に構築される。奥壁と樋石は掘り方いっぱいに置かれ、両側壁も腰石をみれば同じ状況



第126図 1号墳出土遺物実測図（縮尺1/2）

から、西側斜面にのびる墓道を検出した。東端部から傾斜面に沿って3.5m西行し、そこからL字状に折れ、南へ5m続く。幅50~70cm、深さ15cm前後。

閉塞 梱石の上面から漢道部にかけ幅30cm前後の割石を積み重ねて閉塞としている。

#### (4) 遺物

玄室内からはガラス玉24、滑石白玉5が出土した。玄室の覆土は黄褐色粘質土で、底面近くに赤褐色土が5cmほど堆積する。玉は玄室中央部の赤褐色粘質土中に位置していたが、その多くはこの土の洗浄により取り出したものである。墳丘、掘り方も含めほかの遺物の出土はなかった。

ガラス玉（第126図1~24） すべて径1cm以下のガラス玉である。1が最も大きく径8.5mm、厚さ6.5mm。2~5が径6~5.2mm、6~10が径5~4.5mm、11~13が径4mm、14~18が径3.5mm、19~24が径3mmをはかる。2~24の厚さは径の大小と関係なく13の4.5mmから23の1mmまでばらつく。平均の厚さは2.7mm。色調は1~5・7・16・17・19~21・23・24が緑~淡緑色、6・9・10・14・23が薄青緑~青緑色、8・11・13・18が青色となる。

滑石白玉（第126図25~29） 灰黒色の滑石を用いた白玉で、半次の29をのぞけば、径4.5mm、厚さ2mmとよく大きさがそろっている。側面には縱方向の研磨痕が残る。

#### 2) O-2号墳（第122・123・127・128図、図版60・62）

##### (1) 位置と現状

尾根北側の高まりの南側斜面、標高69.25m付近に築かれた古墳である。北の3号墳石室から約3m離れる。検出時、あたりは大木の根が大きく張り、東西両側は切り下げられ、尾根はやせ細った状況にあった。木の根に接して石材の一部が露出していたので、そこを中心に掘り下げたところ、東側に開口するきわめて小型の横穴式石室を検出した。石室の基底面標高は68.98mである。

##### (2) 墳丘（第122・124・127図）

石室は尾根等高線に直交して配置される。唯一北側に設定したCトレンチからみれば、3号墳の墳丘上から石室の掘り方が行われていることが判明したものの、地山整形や墳丘のあり方は明確にできなかった。石室長、失した天井部などを考えると盛土による径3mほどの墳丘を想定してもよいかかもしれない。

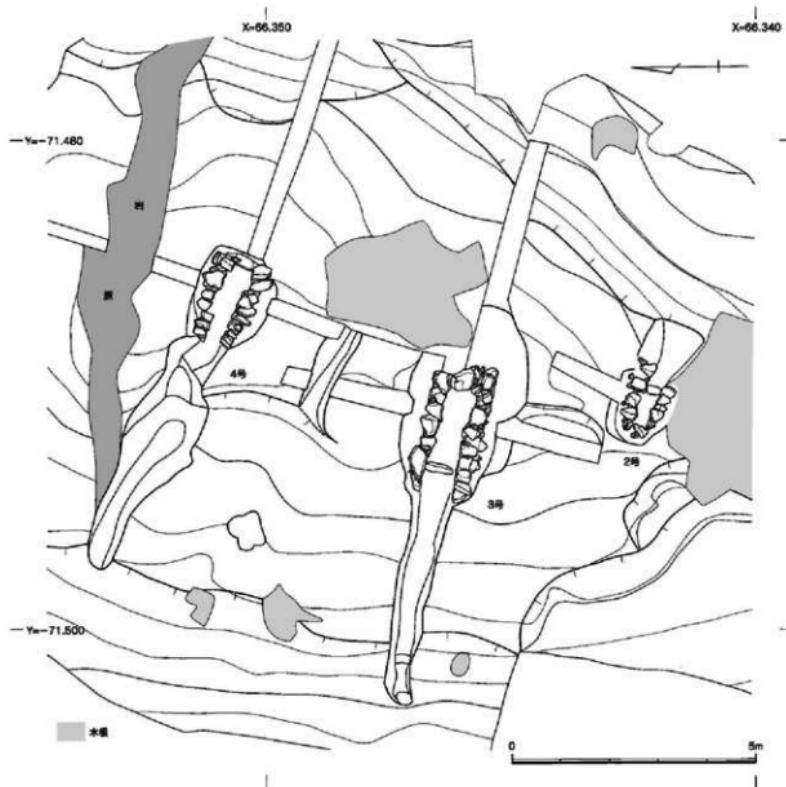
##### (3) 横穴式石室（第127・128図）

上は小型の割石を使って奥壁側の腰石上面とそろえ、またその上にさらに二段石を積み上げ、奥壁側の二段目上面と高さをそろえる。右壁は玄門側が二段、ほかは三段の石積みが床面から0.8~0.9mの高さで残る。上段に使用した割石は腰石より大振りであり、東側の二段目は小割石を使用し三段目の安定をはかったものである。両側壁は上に行くにつながる玄室内面にせり出る。玄門には幅50cmの楕石に相当する板石が底面から高さ0.5mに直立し、側壁で固定する。底面での敷石はなかった。

墓道 直立した楕石の上面近くから西に40cmほど延びるが、その先は段落ちで不明。底面幅20~30cm。両側壁には底面からやや浮いた状態で割石を置く。

墓道 漢道端部の段落ちから1m離れた標高68m付近

には底面からやや浮いた状態で割石を置く。

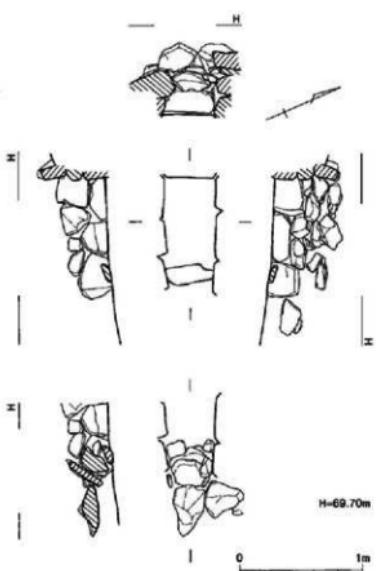


第127図 2～4号墳号墳地山整形測量図（縮尺1/100）

2号墳の埋葬施設は主軸をN-65.0°-Wにとり、O群のなかではただ1基だけ東側に開口する単室の横穴式石室である。天井部は失われているが、壁面は2～3段残存する。石室は長方形の玄室に短い羨道がついたもので、全長は左壁で0.90m、右壁で0.95mときわめて小さい。石室を構築する石材はすべて花崗岩である。

**石室掘り方** 石室は東側斜面を切りくぼめた東西幅1.20m前後の梢円形状の掘り方内に、奥壁、両側壁とも掘り方の内側20cm程から構築される。基底面は東に向いわずかに傾斜し、腰石はこの面に直接据え置く。

**玄室 奥壁・前幅ともに0.4m、両側壁長0.75mの長方形の平面形を呈する。** 奥壁は三段で、腰石には幅43cm、高さ32cmの割石を置く。三段目は両側壁から1石ずつを送り出すような配置となる。奥壁の高さ35cm。両側壁とも腰石は幅25～35cm、高さ15～35cmの割石を3石ずつ置く。左壁は二段、高さ45cm、右壁は四段、57cmが残存する。右壁二段目以上は小割石の積み重ねとなる。玄室前面部分の両腰石の間に扁平な割石を用い櫛石とする。底面での敷石はない。



第128図 2号墳石室および閉塞実測図（縮尺 1/40）

そこを中心に掘り下げたところ、西側に開口する小型の横穴式石室を検出した。石室の基底面標高は68.78mである。

#### (2) 墳丘 (第122・124・127図)

地山整形 石室は尾根等高線に直交して配置される。木の根や削平で不明な部分が多いが、A、Cトレレンチからみれば、北側の地山を深さ15cm、南側の地山を深さ20cmほど掘り下げ、南北幅5.3mの底面が北から南側に約20cm低くなるくぼみを造り、その中央に石室掘り方を設けている。北側の墳裾が掘り込み端から50cm南側の底面にあることから、掘り込み北側部分は尾根の切り離しもかねているとみられる。この切り離しはⅠ区で東西に2.5m延びているが、Ⅱ区は木の根で確認できなかった。Ⅲ、Ⅳ区では切り離しは認められない。

墳丘 墳丘は整形した地山を基底とし、盛土には地山の赤褐色砂質土を主に用いる。Aトレレンチの墳丘は高さ50cm程度残存し、石室掘り方付近まではほぼ水平に盛土を行っている。Cトレレンチでは高さ35cmほどの残りで、石室掘り方に向かって南から傾斜するような盛土を行う。石室の裏込めの土層は、Aトレレンチでは腰石が大きいためか一気に埋められたような状況を示し、Cトレレンチでは細かい層で側壁を固定している。Bトレレンチでは奥壁と掘り方の間が大きく、奥壁に接するところは細かい層、その外はやや大きい層となっている。栗石の使用はない。石室中軸から北側墳裾までが2.5m、奥壁底面内側から東側の墳裾が2.65mをはかることから、3号墳は南北幅5m、東西幅5.5m前後の円墳であったものと考えられる。玄室は墳丘の西側に寄ることになるが、奥壁側の石室掘り方からみて、石室位置の当初の計画と実際の構築に変更が生じた可能性もある。なお2号墳、4号墳は3号墳の墳丘

墓道 榆石の前面40cmほどに玄室と同じ幅の短い墓道を設ける。右側壁に貼石が残る。

墓道 墓道の先端から段落ちまでの間、東に開く深さ30cmの墓道が残存する。東端部幅1m前後。

閉塞 榆石の上から外側に小割石を積み重ねる。榆石外側の下部は土を盛り、その上に石を重ねる。

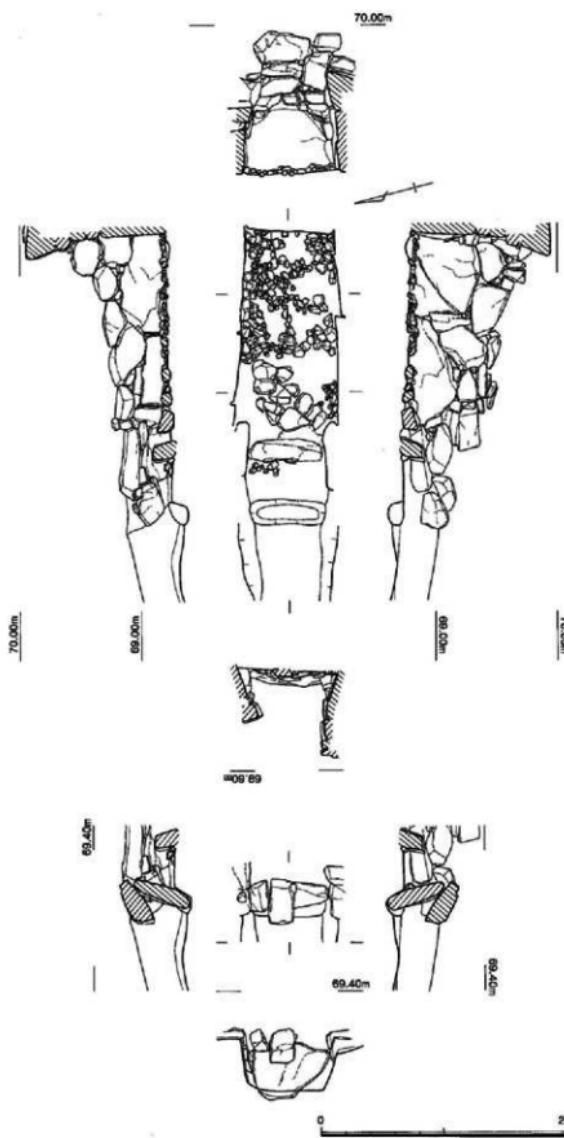
#### (4) 遺物

墳丘、石室内いずれからも出土遺物はない。

### 3) O-3号墳 (第122・124・127・129~134図、図版60・63・64・66~68)

#### (1) 位置と現状

尾根北側の高まりの中央南寄り、標高69.75m付近に築かれたO群中では最も石室規模の大きな古墳である。南の2号墳石室から約3m、北の4号墳石室からは約4m離れる。検出時、尾根部を境に西側斜面は大きく削り取られ、尾根線上から東側斜面にかけてはいくつもの大木の根が大きく張り、古墳が存在する状況にはみえなかった。西側斜面にいくつかの転石があり、



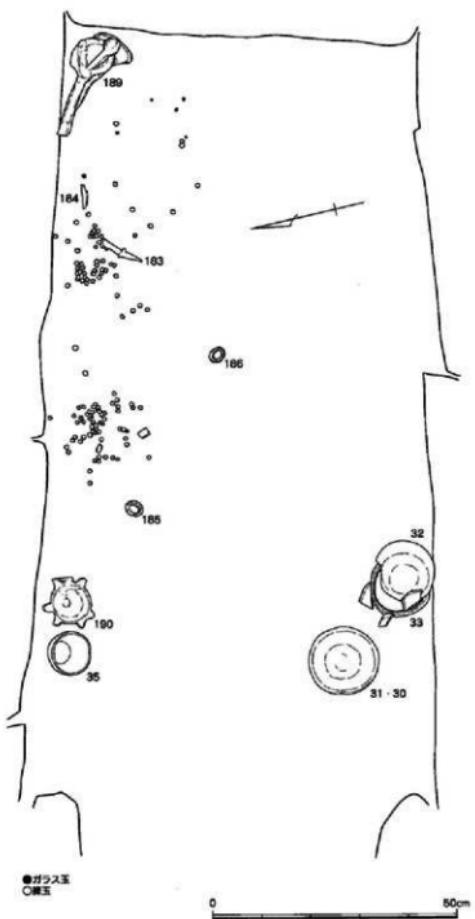
第129図 3号墳石室および閉塞実測図（縮尺 1/40）

を切って築かれている。

(3) 横穴式石室  
(127・129図)

3号墳の埋葬施設は主軸を S-77.0°-E にとり、西側斜面に開口する単室の両袖型横穴式石室である。天井部はすでに失われていたものの、奥壁で腰石を含め四段、側壁で二、三段が残存しており、また敷石の一部、閉塞施設、墓道も確認できた。石室平面は長方形の玄室に、短い横道がついたもので、横道東端部には樋石が、西端部には閉塞を設ける。石室の全長は左壁で 2.25m、右壁で 2.20m と小型ではあるが、O 群では最も大きい。横道端に続き墓道がほぼ一直線に西斜面を下る。石室各部を構成する石材はすべて花崗岩である。

石室掘り方 石室は、地山整形面のはば中央を切りくぼめた東西長 4.1m、南北幅 2.4m の梢円形状の掘り方内に構築される。両側壁ははば掘り方いっぽいに置かれるが、奥壁は先述したように掘り方東端上面から 1.3m 内側から築かれている。掘り方基底面は平坦で、石



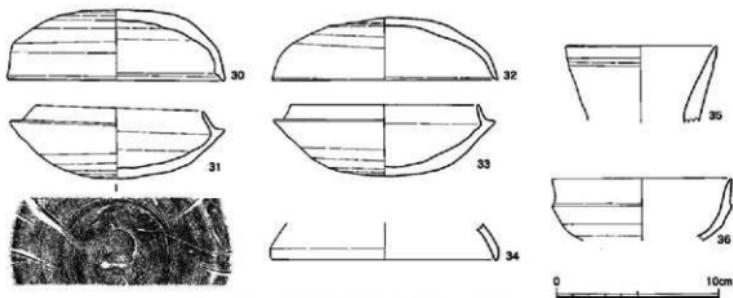
第130図 3号墳玄室内出土状況実測図(縮尺1/10)

墓道 底面幅60cm前後、長さ65cm。両壁面は袖部をつくりだした扁平な割石を用い、底面から二段分、高さ40cm前後が残存する。西端の側壁石はともに張石となる。玄門から西に15cmの底面に長さ60cm、幅17cmの粗石を墓道幅ほぼいっぱいに据え置く。粗石西端から閉塞までは30cmで、底面は小砾による敷石が行われていた痕跡がある。

墓道 墓道端部から西側斜面に向け直線的に4.3m下る。幅50~70cm、深さ30cmで、下るにつれ幅、深さとも減少する。墓道端部から西端部までは1.2mの高低差がある。

室腰石、樋石はこの基底面をやや掘り込んで安定をはかっている。

玄室 奥幅0.73m、前幅0.85m、左壁長1.57m、右壁長1.53mの玄門側がやや広い長方形の平面形を呈する。奥壁は底面から四段、腰石には幅80cm、高さ60cm割石を置き、その上は各段を2石の割石で積み上げる。奥壁の底面から残存高は115cmで、二段目からは玄室内側にせり出す。側壁は底面から二~三段が残る。左壁は3石の腰石をとするが、奥壁側から袖部に向い規模が小さくなり、玄門側の1石は幅15cm、高さ25cmの小割石となる。右壁の腰石は2石の比較的大振りの割石を置く。両側壁とも腰石の形態、規模がまちまちであるため、二段目より上の側壁石の配置、規模はその部位によって異なり、右壁はとくに段ごとの高さのそろいがない。底面からの高さはともに奥壁側で左壁が80cm、右壁が95cm前後残存し、二段目以上は玄室内側にせり出し気味となる。玄門は両側壁の腰石をやや内側に置くことで袖部をつくる。袖幅は両側とも10cm前後、玄門幅は60cm。玄室床面には敷石が施され、奥壁から1m付近までは10cm未満の砾、そこから玄門部までは10~20cmの大振りの砾を主に敷く。ただ盗掘などにより右壁側を中心に敷石が欠失する部分がある。



第131図 3号墳出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

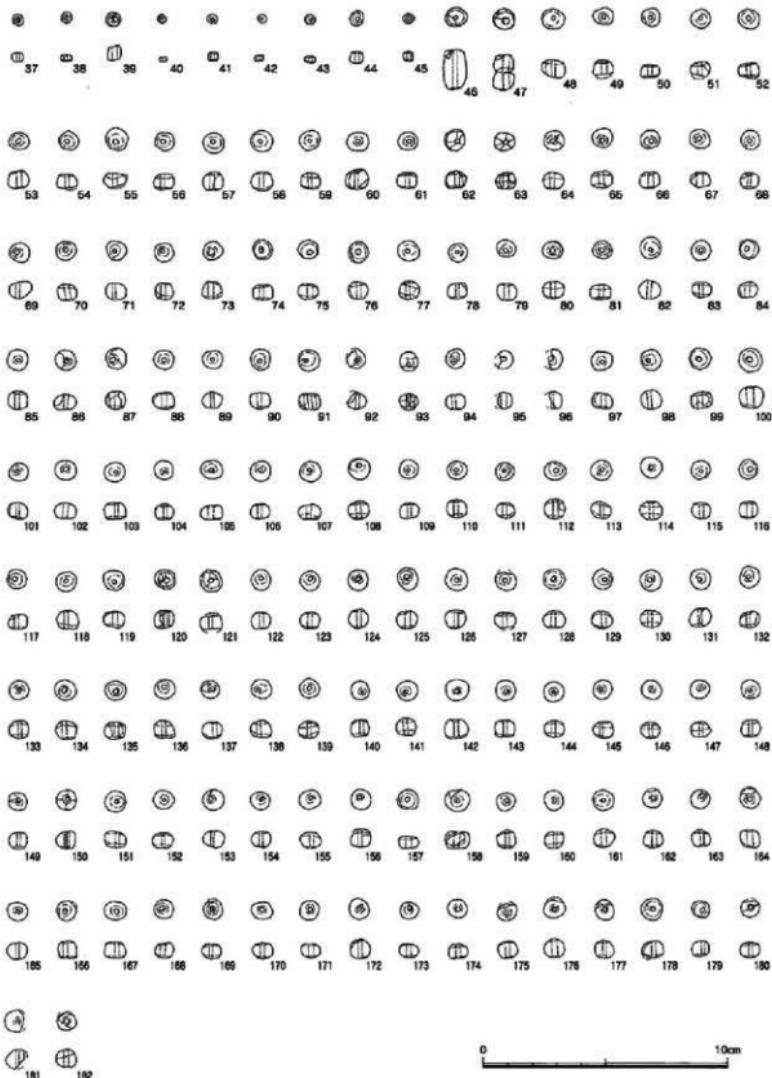
閉塞 棚石から西30cmの底面に幅60cm、深さ18cmの溝状の掘り込みを設け、そこに上面幅60cm、高さ46cm、厚さ14cmの扁平な三角形状板石を、逆に埋め込む。側壁との間隙は小砾をはめ込み固定し、また上面には板石に直交するように長方形の割石を置く。墓道側の下部には土を盛ったものと考えられる。

#### (4) 遺物

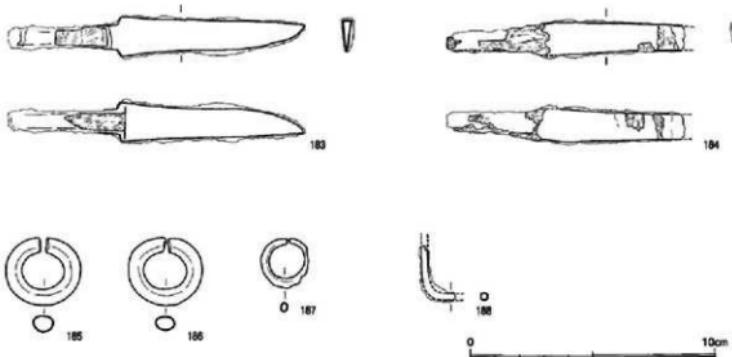
遺物出土状況（第130図） 石室は天井部を失い、また玄室の敷石が荒らされていることから盗掘を受けたのは確実である。しかし、左側壁下と右袖部分に須恵器、耳環、玉類、馬具、鉄製刀子が残されていた。須恵器は右袖近くから蓋杯二組が出土し、袖寄りの一組（30・31）は杯身が上に、その東側の一組（32・33）は蓋が上になった状態で組合う。また左袖近くでも壺の口縁（35）出土した。耳環は石室中央（186）と西北に35cm離れた部分（185）で一対、ほかに玄室覆土からも1個（187）出土した。玉類は右側壁下の中央と、その東側から奥壁にかけての二ヶ所に分かれ、後者にガラス玉が多い。玉類は玄室覆土からも出土しており、これは土の水洗により取り出した。鉄刀子は東寄りの玉群のなかに近接して出土した。馬具は奥壁と左側壁の隅角で替（189）が、左側壁下の南袖寄りで雲珠（190）が出土した。玄室のほか、墳丘から須恵器片（34・36）、墓道から鉄製品（188）が出土している。

須恵器（第131図30～36） 30・31と32・33はそれぞれ組合わさって出土した蓋杯。30は口径13.3cm、器高4.3cmの壺。体部と天井部の境に浅い沈線を施し、口縁部は外に引き出し内面に段がつく。31は口径10.3cm、器高4.3cmの杯身。受部は短く、立ち上がりは内傾する。底部外面にはヘラ記号がある。32は口径13.8cm、器高3.8cmの杯蓋。天井部から体部が丸みをもって外傾し、口縁端部は尖り気味におさめる。33は口径11.4cm、器高4.3cmの杯身。受部は短く、立ち上がりは内湾気味に立つ。これら杯蓋の天井部、底部は逆時計回りのヘラ削りを行う。34は復元口径14.0cmの杯蓋の口縁部片。35は壺あるいは壺の口縁部。口径9.3cm、口縁部直下には2条の沈線を施す。焼きがあまく、淡灰色を呈する。36は無蓋高杯の杯部片。復元口径11.0cm。体部との境に段がつき、口縁部がわざかに外反する。体部下半はヘラ削りを行う。

玉類（第132図37～182） 37～45はガラス玉。径は44の5.5mmから40の3.3mmまで。平均4.2mm。厚さは39の5.5mmから40の2mmまで。平均3.4mm。37～41が青緑色、42～44が濃緑色、45が黄色を呈する。46～182は土製線玉。破片も含め175個出土したが、完形のもの137個を図示した。いずれもいぶされ黒色を呈する。46は長さ17mm、径9mmの管玉状のもの。47は連玉。長さ14.5mm、径8～9mm。48～182



第132図 3号墳出土遺物実測図2 (縮尺1/2)



第133図 3号墳出土遺物実測図3 (縮尺1/2)

は丸玉。径7~9.7mm、平均8.1mm、厚さ6~8mm、平均6.8mm。

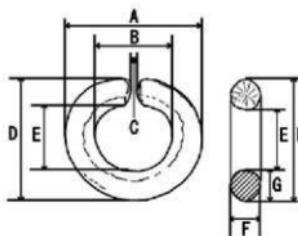
#### 金属器(第133・134図)

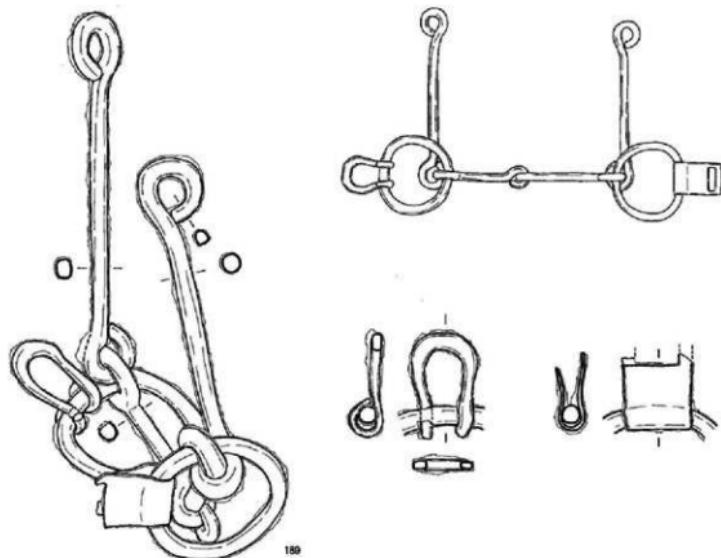
3号墳からは石室より金属器として装身具(耳環)3点、工具(刀子)2点、馬具2点、不明鉄器1点の計8点が出土している。以下、概要を記す。

耳環(第133図185~187) 各資料の法量は別表に示す通りである。185、186は外観、寸法などがよく似通っている。外表は白味を帯びた金色と腐蝕によるとと思われる青黒い部分が斑になった金属薄板に覆われ、それが破れた部分から緑青を吹いた芯材が覗く。また開口部端面には金属薄板の絞り部が観察される。蛍光X線分析装置による材質調査でも、双方とも芯材は若干のヒ素を含む銅、外表は銀、金、銅と水銀が検出されており、銅芯に銀薄板を巻いた後、アマルガムによる鍍金が施された構造と推測される。観察、分析結果共に、2点がセットであることを示している。

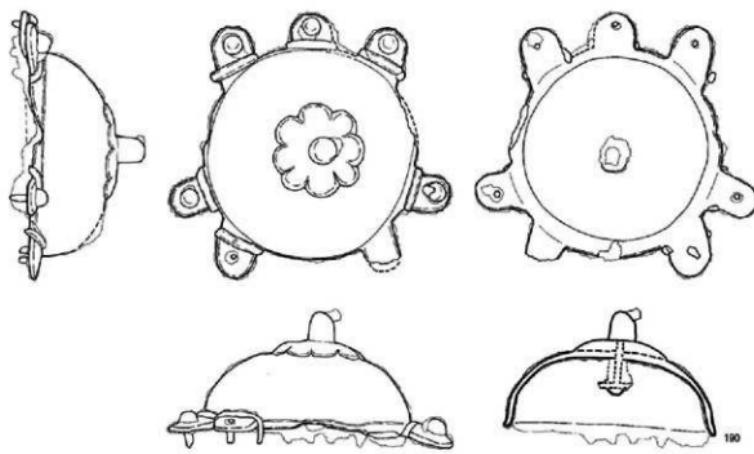
これに対して187は腐蝕が著しく、部分的に痩せ細るなど本来の姿からはほど遠いと思われる。現状では表面の加飾は確認できず、分析でも銅を主成分として若干のヒ素を含む可能性が示されるのみである。ただし腐蝕によって表面装飾が失われた可能性も否定できない。

| 番号  | 寸法(mm) |       |      |       |       |      |      | 重量(g) |
|-----|--------|-------|------|-------|-------|------|------|-------|
|     | A      | B     | C    | D     | E     | F    | G    |       |
| 185 | 30.25  | 17.00 | 2.00 | 27.30 | 15.25 | 7.95 | 6.55 | 18.51 |
| 186 | 30.25  | 17.65 | 1.30 | 27.25 | 16.05 | 7.70 | 6.35 | 19.14 |
| 187 | 19.50  | 14.60 | 0.30 | 19.85 | 14.70 | 2.75 | 3.35 | 1.41  |





189



0 10cm

第134圖 3號墳出土遺物實測圖4 (縮尺1/2)

鉄製刀子（第133図183・184） 現状では金属部分を中心に残存するが、双方とも茎部分に有機質の付着痕が残る。その内、183では布、もしくは糸状のものを巻いた痕跡が両面に、そして片面にはその上に木質状の痕跡が残っており、何かを巻き付けた後で木製の柄を取り付けたと推測される。184では茎両面に木質が残存する他、刀身部分の一部に、やはり糸状のものを巻き付けた痕跡が認められる。しかし顕微鏡観察でも織り目などは見られず、その材質は不明である。

寸法は183が全長122.5mm、刃部の最大幅16.5mm、峰の最大幅6mm、また切っ先から圓まで計る刀身の長さ（註）は76.5mmである。184は現存長98mm、刃部最大幅15mm、峰の最大幅4.5mm、残存刃部長57mmである。

（註）刀身に成形された圓に対して、柄の木質端は2~3mm程切っ先側に入り込んでいる。

馬具（第134図189・190） 189は馬具の轡、190は同じく雲珠である。189は鉄製環状鏡板付轡に分類され、若干上半に最小カーブを持つ、幅65mm、綫60mmの偏円素環の鏡板を有する。衡は二連で、その両端環部に鏡板と引手が組み合わさる構造となっている。その両端環内側の幅（衡長）は95mm、引手は、やはり環の内側の棒状部分のみで計ると、片方は98mm、もう一方は8mmと若干の違いが見られる。また各部材も鋸のため正確な数値は不明であるが、概ね太さ8mm程度で、断面は部分的に後を有するように見えるところもあるものの基本的に円形と思われる。そして端の環は底手状に加工成形されている。

特にこの轡で注目すべきは立闇の形状が左右で異なっている点である。片側は断面矩形で幅5mm前後、厚さ2mm程の棒をU字形に加工し、端部を鏡板に巻き付けて固定しているのに対し、もう一方は幅26mm、厚さ1mmほどの鉄板を鏡板を挟み込むように折り曲げている。その片側端部は破損しているようであるが、よく見ると刺り込み状の加工が施されており、本来は頭絡の革紐などを通すための長方形の孔があったものと推測される。なお双方ともに有機物の残存は認められない。

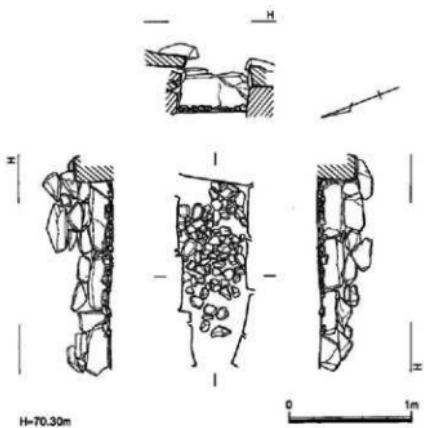
190の雲珠は半球状の鉢に、真上から見た場合の上半に3本、下半に4本の端部が爪先形をした脚が偏在して作り出されている。鉢頂部には別作りで8弁の花弁状金具が大型の鉢によって固定されている。この鉢の脚は鉢の内側に抜け、下端は梢円形の金具を挟んで丸く収められている。また鉢外面の下端近く、脚が取り付く上側には若干の段が1段分作り出されており、凹線状に見える。

各脚には基本的に資金具と鉢が一つずつ取り付けられているが、下半の右内側の脚は資金具が無く、透過X線による観察では鉢孔も認められない。脚の先端は欠損しているため失われた部分に鉢が有ったとも考えられるが、資金具が無いのもこの脚のみで、他の脚と比べて若干貧相に見えることもあり元から何も無かった可能性も否定できない。

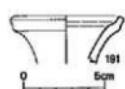
現状では全体が鉄錆に覆われているが、装飾部分には一部綠青らしき痕跡が観る部分もあり、分析や観察の結果、頂部の鉢頭、花弁金具、脚の資金具、同じく鉢は鉄地金銅張、本体の鉢と脚は鉄製であると考えられる。また資金具は一条で刻み目は無い。

なお寸法は、脚も含めた部分で縦107mm、横幅116mm、鉢部分のみの径88mm、高さは全体で54mm、鉢部分のみで30mmを計る。また鉢部の厚さは1~2mm程度と考えられる。

不明鉄器（第133図188） 角の丸いL字状を呈する鉄製品で、断面は円形である。両端は欠損し、現状で縦24mm、横幅15mm、太さ3mmを計る。有機物の付着などは認められない。この破片のみから本来の姿を知るのは容易ではないが、敢えて推測するならば、馬具のセットが存在することから考えて頭絡に用いられる鉢具や、海辺に近い立地から釣り針等の可能性が考えられる。



第135図 4号墳石室実測図（縮尺 1/40）



第136図 4号墳出土  
遺物実測図(縮尺 1/3) 用いる。いずれのトレンチをみても墳丘は大きく削られ、厚さ10cm程度の層が基底面から2~3層残るだけである。Cトレンチでの墳丘残存高は30cm前後であり、石室がその上に出る状況である。木の根で不明なところもあるが、石室掘り方が浅いため、石材を置いたあと裏込めの土で固定し、墳丘の盛土を行なうという手順を繰り返しているようにも見える。裏込めに栗石の使用はない。石室中軸から南側墳裾までが1.9m、奥壁底面内側から東側の墳裾が1.7mをはかること、また周囲の等高線の流れからみて、4号墳は径4m前後の円墳であったと考えられる。

### (3) 横穴式石室 (第127・135図)

4号墳の埋葬施設は主軸をS-69.0°-Eにとり、西側斜面に開口する単室の片袖型横穴式石室である。天井部はすでに失われていたものの、奥壁で腰石を含め四段、側壁で二~四段が残存しており、また敷石の一部、墓道も確認できた。石室平面は長方形の玄室に、短い羨道がついたものであるが、襖石は認められない。石室の全長は左壁で1.55m、右壁で1.48mと小型である。石室各部を構成する石材はすべて花崗岩である。

**石室掘り方** 石室は、地山整形面のほぼ中央を切りくぼめた東西長2.1m、南北幅1.5mの長方形状の掘り方に構築される。奥壁、両側壁ともほぼ掘り方いっぱいに置かれる掘り方基底面は平坦で、石室腰石はこの基底面をやや掘り込んで安定をはかっている。

**玄室** 奥幅0.55m、前幅0.54m、左壁長1.10m、右壁長1.04mの長方形の平面形を呈する。奥壁は幅60cm、高さ60cmの割石を用いた腰石が残存するだけで、北側がやや外に開くように置く。奥壁の底面から残存高は46cmである。側壁は底面から二~四段が残る。左壁は2石の腰石をすえ、二段目はやや

### 4) O-4号墳 (第122・123・127・135・

136図、図版60・65)

#### (1) 位置と現状

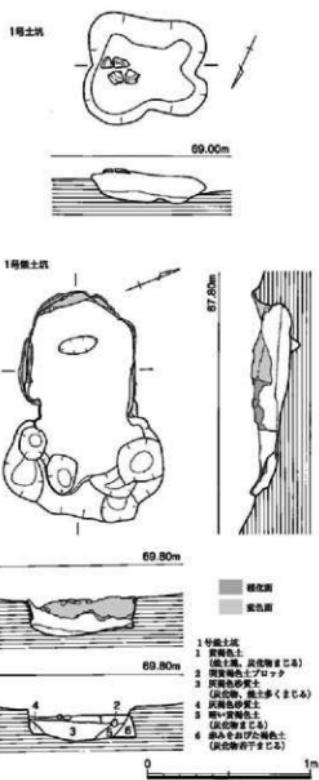
尾根北側の高まりの北端、標高70m付近に築かれた古墳である。南の3号墳石室からは約4m離れる。検出時、尾根部上部は平坦で、北側斜面にかけて花崗岩の岩脈が一部露出していた。この平坦面に礫が見える部分があり、そこを中心にして遺構の確認を行ったところ、天井を失った西側に開口する小型の横穴式石室を検出した。石室の基底面標高は69.52mで、O群のなかでは最も高い。

#### (2) 墳丘 (第122・123・127図)

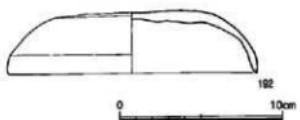
**地山整形** 石室は尾根等高線に直交して配置される。尾根北側は削り取られる。

石室の北側には岩脈が東西に走っており、地山整形にあたってはこの岩脈も含め尾根の高まりを3m程の範囲で削り下げる。平坦な基底面を造り、その中央に石室掘り方を設けている。この基底面は石室南側が低くなる。IV区南側は3号墳の墳丘を削り、幅1mの切り離しを行うが、III区部分は大木の根が張るためにその継ぎは確認できなかった。

**墳丘** 墳丘は整形した地山を基底とし、盛土には地山の赤褐色砂質土を主に用いる。いずれのトレンチをみると墳丘は大きく削られ、厚さ10cm程度の層が基底面から2~3層残るだけである。Cトレンチでの墳丘残存高は30cm前後であり、石室がその上に出る状況である。木の根で不明なところもあるが、石室掘り方が浅いため、石材を置いたあと裏込めの土で固定し、墳丘の盛土を行なうという手順を繰り返しているようにも見える。裏込めに栗石の使用はない。石室中軸から南側墳裾までが1.9m、奥壁底面内側から東側の墳裾が1.7mをはかること、また周囲の等高線の流れからみて、4号墳は径4m前後の円墳であったと考えられる。



第137図 1号土坑、1号焼土坑実測図 (縮尺1/30)



第138図 1号土坑出土遺物実測図 (縮尺1/3)

## 6) 焼土坑

### 1号焼土坑 (第137図・図版62)

1号古墳の西側斜面で検出した。長軸をほぼ東西にとる楕円形状の土坑だが、東側が木の根で荒らされており、壁線が不明瞭となる。残存する部分からみれば長さ1.25m前後、幅0.65m、深さ25cm前

小振りの割石5石を、三段目は二段目より大振りの石を置く。底面からの高さは奥壁側で55cm。右壁の腰石も左側と同規模の2石を置き、その上は小振りの石を積み重ねる。底面からの高さは奥壁側で45cm。玄門左壁は幅15cm、高さ25cmの長方形割石をやや内側に立て置くことで袖部をつくる。袖幅は10cm。右壁は奥壁から3石目の腰石が直線的に延び、玄門幅は45cmをはかる。玄室床面には10cm前後の礫による敷石が施される。敷石の石材はほとんどが花崗岩であるが、一部青みをおびた石が混じる。

狭道 玄門部から45cm西に延びる。西端は幅28cmで玄門部より狭くなる。両壁面は底面から二段分、高さ25cm前後が残存する。玄門付近の底面には礫がみられるが、櫛石は確認できなかった。

墓道 墓道端部から西側斜面に向か直線的に5.1m下る。底面は2ヶ所ほど段がつき、岩脈にあたる部分もあり幅も70~160cmと一定でなく、深さもまちまちである。墓道端部から西端部までは1mの高低差がある。

### (4) 遺物 (第136図)

石室内、埴丘内、墓道からの出土遺物ない。唯一の遺物は埴丘上面で採集した須恵器片だけである。

須恵器 (第136図191) 鹿あるいは提瓶の口縁部片である。復元口径7.0cm。

### 5) 土坑

#### 1号土坑 (第137図)

3号、4号古墳の間の西斜面で検出した不整形の土坑である。東西長0.75m、南北幅0.65m前後、深さ18cm。覆土は暗褐色砂質土。東側上面から須恵器が出土した。

出土遺物 (第138図192) 口径15.2cm、器高3.8cmの杯蓋である。口縁端部は尖り気味におさめる。天頂部にのみ時計回りのヘラ削りを行う。

後となる。側壁はほぼ垂直で、被熱で壁面が青灰色に硬く焼け、その外側も赤褐色に変色する。覆土には焼土、炭化物、焼けた土塊混じる。出土遺物はなかった。

#### 4 小結

##### 1) 出土馬具について

3号墳出土の馬具を中心に若干気づいた点を記しておきたい。

まずセット全体についてであるが、一般的に考えると馬具は主に騎乗に必要なもの（轡、鐙、鞍）と、装飾品（辻金具、雲珠、杏葉など）に分けられる。そして前者は有機質のものでも対応が可能で、後者は人目を引くことが目的のため金属、それも貴金属が用いられる場合が多い。古墳に副葬される馬具を考える場合、我々が目にするのは腐蝕を免れて形を残しているもののみであり、その多くは金属製品である。元岡O-3号墳では騎乗具である轡と装飾品の雲珠のみで、鐙や鞍は金属製の部品を含めた痕跡すら無い。これらが大部分有機質であった可能性や、一部が盗掘などで失われた可能性も否定できないが、他にも帶金具や鉢具も無く、雲珠があるにも関わらず、それにつり下げられるべき杏葉が無いという状況は何ともアンバランスといわざるを得ない。

セットの時期としては、馬具から見ると、轡は岡安光彦氏の分類（岡安1984）に依拠すれば、引手は「直柄引手」、鏡板・引手・銜の連結は「引手・銜共連法」となる。また銜は二連で衡先環が大きく鏡板と引手とを併に連結する「大環銜」に近いが、作りは藤手状となっている。問題は鏡板と立闇の構造で、偏円形の鏡板に連結式の立闇を有するタイプに分類されるが、本例のような立闇はどちらも設定されていない。敢えて近いものを探すならばU字形の方は單連兵庫鏡か雙連兵庫鏡となるが、前者は鏡板が正円で、後者は鏡板こそ偏円であるが立闇の構造が根本的に異なる。銜や引手の構造、その連結法からはTK-43型式平行期を遡らない時期が想定され、更に鏡板の平面形は正円から偏円へ、また大きさは次第に小型化するという要素も特に矛盾するものではないと考える。

雲珠は宮代栄一氏の研究が著名である（宮代1986・1993）。氏の設定した雲珠各要素の分類を全て包括する類例は示されていないものの、総合して考えるならばV期（TK-43～TK-209型式前半平行期）に比定するのが妥当性が高いようである。この様に馬具からはTK-43～TK-209型式前半平行期という時期が導き出され、これは出土須恵器の時期よりは微妙に新しくなる可能性もあるが、TK-43平行期に妥協点を見いだせば大きな齟齬は生じないであろう。

最後に轡における立闇の違いであるが、立闇ではないものの引手が左右非対称な轡は、松尾昌彦氏によって修理痕として捉える研究がある（松尾1996）。また栗林誠治氏は徳島県山田SM1001号墳出土の特異な構造を持つ鎧兵庫鏡を元に、馬具の修理について述べている（栗林1999）。氏らは、これら修理痕から、地方にも馬具の構造を理解し修理をする技術者の存在を想定し、更に馬具の地方生産の可能性を導き出している。左右の長さが極端に異なる轡は、本市でも南区桧原2号墳で出土している。筆者はこの報告にも携わっているが（比佐1997）、これを記した時点では上記の研究は知らず、また修理痕という発想もなかったため、長野県天白古墳の類例を提示した程度で事実報告のみに終始していた。本例の場合、まずこれが修理痕か否か、そして修理痕とすればどちらがオリジナルかといった点が問題となろう。修理の可能性については、逆に、左右が異なる他の理由が考えられるであろうか。既に製作時点で棒または板素材が不足した結果、あるいはデザインとして意図的に左右非対称を狙ったといった理由も考えられなくはないが、わざわざ複雑、あるいは特異な理由を考える必要もないであろう。ここでは、やはりどちらかの破損に伴う修理痕と捉えたい。では、どちらがオリジナルかという問題であるが、いずれの型式も簡単に類例が見当たらない形状である。辛うじてU字形の

方が單連兵庫鏡に近い点や、Uの字の下端を丁寧に成形してカーブを付けるなど豪った作りが認められる点、更に板状に比べて華奢と思われる点などを考え、U字形→板状という流れを想定する。それでは何故、オリジナルと同じか、もしくはできるだけ近いデザインに修理しなかったのであろうか。この問題は空想の泥沼に足を踏み込みかねないものになりそうであるが、やはり細い棒で壊れたので板で再生という、丈夫さの追求と考えたい。しかしそれが事実なら、どの時点かは分からぬが結果的に革紐を通す孔が破損しており、修理とすれば失敗であったのかもしれない。

#### (参考文献)

- 岡安光彦1984「いわゆる「素環の骨」について－環状鏡板付骨の型式学的分析と編年－」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 栗林治哉1999「馬具の修理痕－山田古墳群(A)SM1001出土馬具の再検討－」「真朱」徳島県埋蔵文化財センター
- 比佐藤一郎1997「検原古墳群出土金属器の検討」「検原遺跡・検原古墳群第1次・検原遺跡第3次調査報告書－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第540集 福岡市教育委員会
- 松尾昌彦1996「補修痕のある馬具」「伊那」第44巻第8号 伊那史学会
- 宮代栄一1986「古墳時代貴珠・辻金具の分類と編年」「日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
- 宮代栄一1993「中央に鉢を持つ雲珠・辻金具について」「埼玉考古』第30号 埼玉考古学会

#### 2) 元岡古墳群O群について

これまでみてきたように元岡古墳群O群の4基の古墳は、いずれも小型の横穴式石室をその埋葬主体とする円墳である。後の削平を受けて墳丘はほとんど残らず、また石室も破壊された部分が多くあった。石室規模等をまとめて表にすれば以下のようになる。

|     | 方位        | 石室長       | 玄室長       | 誤道長  | 玄室幅       | 誤道幅  | 玄室面積               | 石室底面積 |
|-----|-----------|-----------|-----------|------|-----------|------|--------------------|-------|
| 1号墳 | N-88.5°-E | 2.2-2.1   | 1.95-1.9  | 0.4  | 0.65-0.5  | 0.3  | 1.11m <sup>2</sup> | 67.90 |
| 2号墳 | N-65.0°-W | 0.9-0.95  | 0.75      | 0.4  | 0.4       | 0.4  | 0.3m <sup>2</sup>  | 68.98 |
| 3号墳 | S-77.0°-E | 2.25-2.2  | 1.57-1.53 | 0.65 | 0.73-0.85 | 0.6  | 1.22m <sup>2</sup> | 69.75 |
| 4号墳 | S-69.0°-E | 1.55-1.48 | 1.10-1.04 | 0.45 | 0.55-0.54 | 0.45 | 0.58m <sup>2</sup> | 69.52 |

(註) 単位の入っていない数字はm。石室・玄室長は左壁長-右壁長、玄室幅は奥幅-前幅。

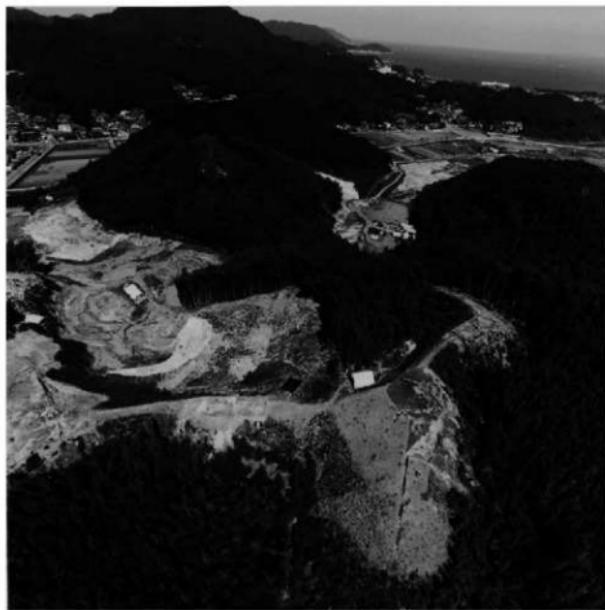
いずれの玄室もかろうじて一人の遺体を埋葬する空間しかないが、石室構造は墓道も含め通常の横穴式石室の範をほとんど踏襲している。また3号墳石室からは耳環が3点出土しており、追葬が行われた可能性さえある。この種の石室をもつ古墳は、数基からなる古墳群のなかの1基に見られることはあっても、それのみがまとまって群をなすことはほとんど例を知らない。

墳丘の切り合いで3号墳が2・4号墳により先行して築造されたことは明らかであり、その時期は出土遺物から6世紀後半と考えられる。2・4号墳はそれ以後となる。1号墳は石室構造がほかの3基とは異なり竪穴式横口式ともみられるもので、同様の石室は規模は違うものの宗像市浦谷古墳群(註)にあり、3号墳より先に築造された可能性が高い。

元岡古墳群A・J・N・O群は6世紀中頃築造された元岡石ヶ原古墳を最高所にその周辺に分布する群集墳である。しかしO群以外は糸島平野を眺望する南斜面に築かれており、前方後円墳裏の北側尾根に築かれた小規模古墳であるO群の被葬者たちの性格がどのようなものであったか興味深い。

(註) 原俊一編『宗像浦谷古墳I』宗像市文化財調査報告書第5集 1982

# 図 版

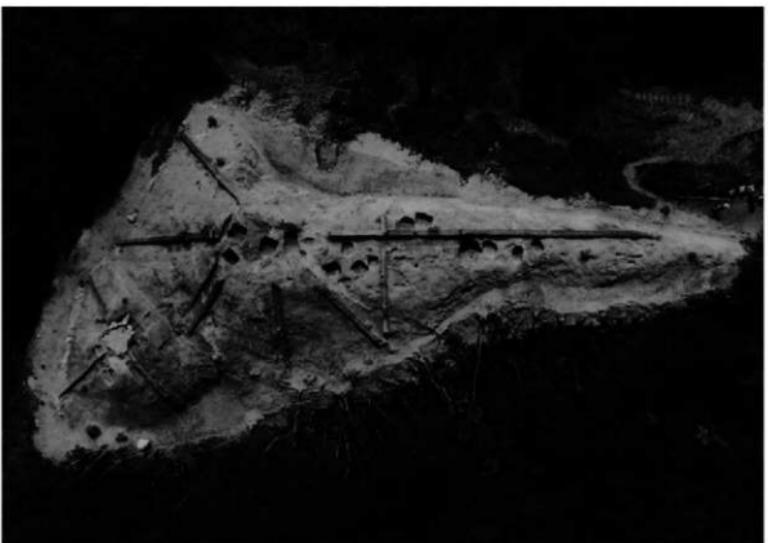


第25次調査地点遠景





1 元岡古墳群E群遠景（北から）



2 元岡古墳群E群遠景（東から俯瞰）



1 E-1号墳全景（前方部から）



2 E-1号墳後円部（西から俯瞰）



1 E-2号墳全景（東から俯瞰）



2 E-2号墳墳丘断面（東から）



3 E-2号墳墳丘遺存状況（西から）



4 E-2号墳墳丘遺存状況（南西から）



5 E-2号墳石室全景（西から）



6 E-2号墳石室第1面（西から）



7 E-2号墳石室第2面（西から）



8 E-2号墳石室基底面と掘方（西から）

図版4

第13次調査



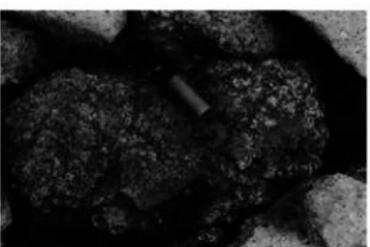
1 E-2号墳石室右側壁（北から）



5 E-2号墳閉塞石（北から）



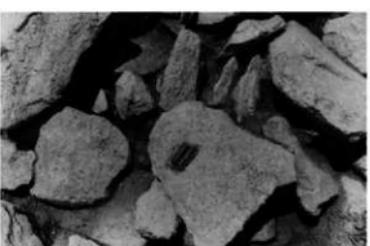
2 E-2号墳石室鉄製農工具出土状況（北から）



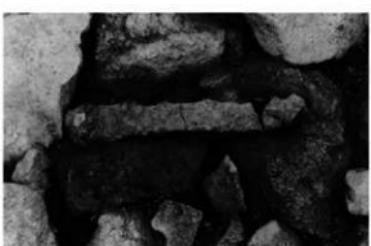
6 E-2号墳石室装身具出土状況（西から）



3 E-2号墳石室農工具出土状況（北から）



7 E-2号墳石室装身具出土状況（北から）



4 E-2号墳石室鉄鎌出土状況（西から）



8 E-2号墳I区周溝遺物出土状況（西から）

## 第13次調査



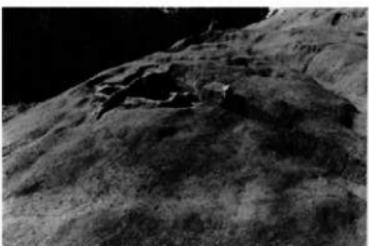
1 E-3号墳墳丘遺存状況（西から）



2 E-3号墳墳丘遺存状況（北東から）



3 E-3号墳墳丘断面（東から）



4 E-3号墳地山整形（北東から）



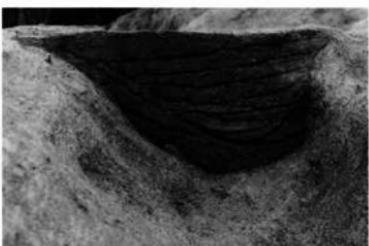
5 E-3号墳内部主体検出状況（東から）



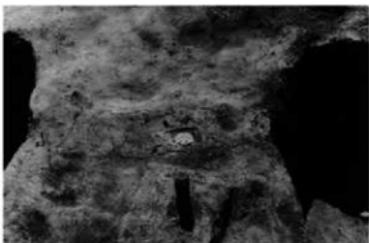
6 E-3号墳内部主体掘り方（南から）



7 E-3号墳内部主体土層（南から）



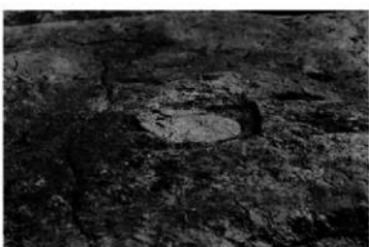
8 E-3号墳周溝土層（北から）



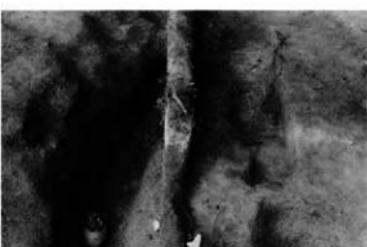
1 E-1号墳青銅鏡出土状況（東から）



2 E-1号墳青銅鏡出土状況（西から）



3 E-1号墳青銅鏡出土状況（北から）



4 E-3号墳周溝遺物出土状況（南から）



5 E-3号墳周溝遺物出土状況（西から）



6 E-3号墳周溝内埋葬（東から）



7 E-3号墳周溝内埋葬（北から）



8 E-3号墳周溝内埋葬顔料検出状況（北から）



1 E-1号墳出土方格T字鏡



2 E-2号墳出土須恵器蓋



4 E-2号墳出土須恵器壺



5 E-2号墳出土須恵器平底壺

3 E-2号墳出土須恵器壺身

79

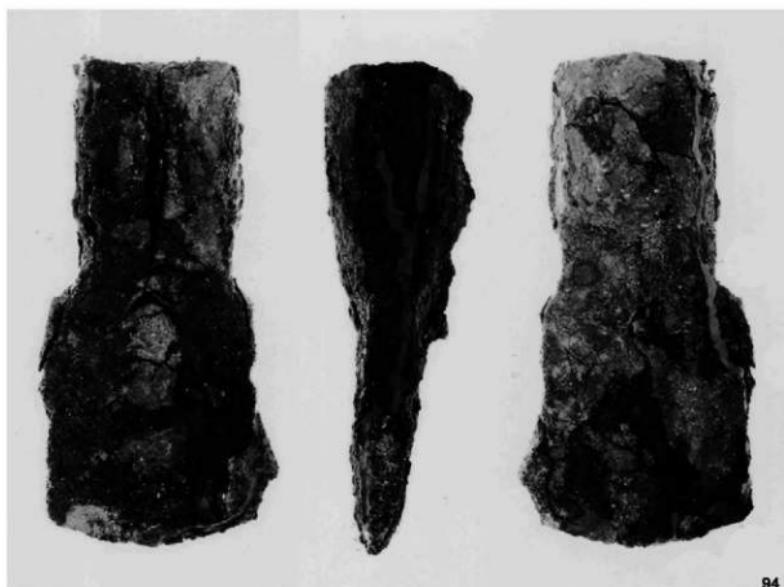
77

81



93

1 E-2号墳出土鉄斧

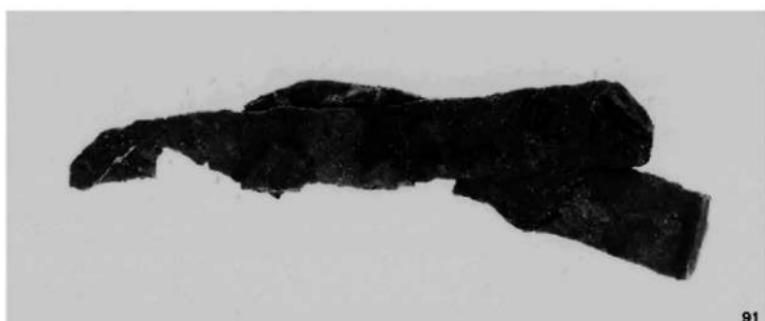


94

2 E-2号墳出土鉄斧



1 E-2号墳出土鉄鎌



2 E-2号墳出土鉄斧



3 E-2号墳出土鉄製鎌先



1 元岡古墳群B群遠景（西から）



2 元岡古墳群B群と池の浦古墳（東から）



3 元岡古墳群B群調査前現況（北から）



1 元岡古墳群B群全景（南から）



2 元岡古墳群B群全景（北から）



3 B-1号墳墳丘遺存状況（西から俯瞰）



4 B-1号墳墳丘遺存状況（西から）



5 B-1号墳地形整形（西から）



6 B-1号墳墳丘断面（北から）



7 B-1号墳墳丘断面（西から）



1 B-1号墳石室全景（北から）



2 B-1号墳石室左側壁（南東から）



3 B-1号墳石室右側壁（北東から）



4 B-1号墳石室出土品（玄室から）



5 B-1号墳石室出土品（北から）



6 B-1号墳石室出土品（北から）



7 B-1号墳閉塞石（南から）



8 B-1号墳閉塞石（玄室から）



1 B-2号墳墳丘断面（北から）



2 B-2号墳墳丘断面（西から）



3 B-2号墳全景（西から）



4 B-2号墳墳丘遺存状況（北西から）



5 B-2号墳地山整形面焼土（西から）



6 B-2号墳地山整形と石室掘方（西から）



7 SK-03焼土壙（北から）



8 SK-04焼土壙（北西から）



1 B-2号墳石室全景（北から）



2 B-2号墳石室第1面敷石（北から）



3 B-2号墳石室右側壁（北から）



4 B-2号墳石室左側壁（南から）



5 B-2号墳石室奥壁（西から）



6 B-2号墳石室基底面（西から）



7 B-2号墳追葬時墓道（西から）



8 B-2号墳閉塞施設土層断面（東から）



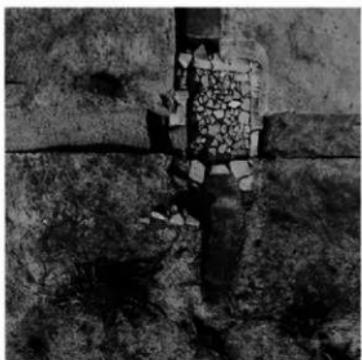
1 2・3号墳墳丘遺存状況（真上から）



2 2・3号墳地山整形（西から）



3 2号墳墳丘遺存状況（真上から）



4 2号墳石室（真上から）



5 2号墳石室掘方（真上から）



6 2号墳地山整形（西から）



1 2号墳石室全景（西から）



2 2号墳石室全景（西から）



3 2号墳石室敷石（南から）



4 2号墳石室掘方（西から）



5 2号墳石室掘方（北から）



6 2号墳現況（西から）



1 2号墳石室第1面検出状況（西から）



2 2号墳石室第3面検出状況（南から）



3 2号墳鉄鉗・鉄金楕出土状況（南から）



4 2号墳墓道第2面検出状況（南から）



5 2号墳閉塞石検出状況（真上から）



6 2号墳Cトレンチ土層（南から）



1 3号墳墳丘遺存状況（真上から）



2 3号墳墳丘遺存状況（西から）



3 3号墳墳丘遺存状況（真上から）



4 3号墳地山整形（西から）



5 3号墳現況（西から）



1 3号墳石室（西から）



2 3号墳石室敷石（南から）



3 3号墳石室（東から）



4 3号墳仕切石（南から）



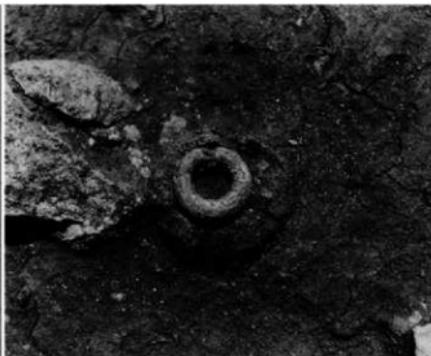
5 3号墳石室掘方（西から）



6 3号墳奥壁掘方（南から）



1 3号墳周溝遺物出土状況（東から）



2 3号墳石室第1面耳環出土状況（真上から）



3 3号墳閉塞石検出状況（真上から）



4 3号墳閉塞石検出状況（西から）



5 3号墳Aトレンチ土層（西から）



6 3号墳Bトレンチ土層（東から）



1 4号墳墳丘遺存状況（真上から）



2 4号墳墳丘遺存状況（東から）



3 4号墳墳丘遺存状況（南から）



4 4号墳地山整形（西から）



5 4号墳地山整形（東から）



6 4号墳墳丘遺物出土状況（東から）



1 4号墳石室（南から）



2 4号墳石室（西から）



3 4号墳羨道左側壁（南東から）



4 4号墳右側壁（北から）



5 4号墳玄室左側壁（南から）



6 4号墳地山整形（西から）



1 4号墳墓道（東から）



2 4号墳墓道（西から）



3 4号墳石室掘方（南から）



4 4号墳玄室遺物出土状況（東から）



5 4号墳Cトレンチ土層（西から）



6 4号墳Cトレンチ周溝土層（西から）



1 4号墳第1面閉塞石検出状況（真上から）



2 4号墳第1面閉塞石検出状況（西から）



3 4号墳第2面閉塞石検出状況（西から）



4 4号墳第2面閉塞石検出状況（真上から）



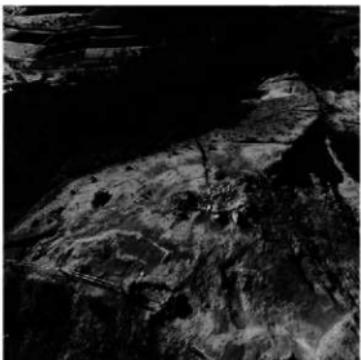
5 4号墳第3面閉塞石検出状況（西から）



6 4号墳立石検出状況（東から）



1 4・5号墳墳丘遺存状況（東から）



2 5号墳地山整形（東から）



3 5号墳地山整形（真上から）



4 5号墳地山整形（西から）



5 4号墳現況（西から）



6 5号墳現況（西から）



1 5号墳玄室床面検出状況（真上から）



2 5号墳石室（東から）



3 5号墳玄室遺物出土状況（南西から）



4 5号墳玄室遺物出土状況（南から）



5 5号墳石室掘方（西から）



6 5号墳閉塞石検出状況（西から）



1 6号墳墳丘遺存状況（南から）



2 6号墳地山整形（南から）



3 6号墳石室掘方（南から）



4 6号墳石室（東から）



5 6号墳石室（西から）



6 6号墳墓道左側壁（東から）



1 6号墳袖石（北から）



2 6号墳石室掘方（南から）



3 6号墳閉塞石検出状況（南から）



4 6号墳西側周溝土層（南から）



5 6号墳閉塞石検出状況（北から）



6 6号墳現況（南東から）



1 7号墳墳丘遺存状況（南から）



2 7号墳墳丘遺存状況（真上から）



3 7号墳地山整形（真上から）



4 7号墳墳丘遺存状況（南から）



5 7号墳墳丘遺存状況（北から）



6 7号墳Aトレンチ土層（南から）



1 7号墳石室（北から）



2 7号墳石室左側壁（東から）



3 7号墳遺物出土状況（北から）



4 7号墳石室掘方（南から）



5 7号墳石室掘方（北から）



6 7号墳現況（南から）



1 7号墳閉塞石検出状況（南から）



2 7号墳墳丘遺物出土状況（南から）



3 8号墳表土剥ぎ状況（南西から）



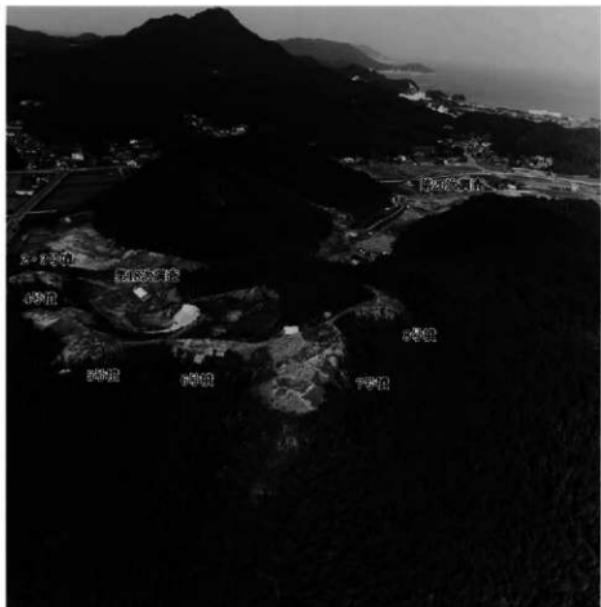
4 8号墳遺物出土状況（東から）



5 8号墳土層A（東から）



6 8号墳土層C（南から）



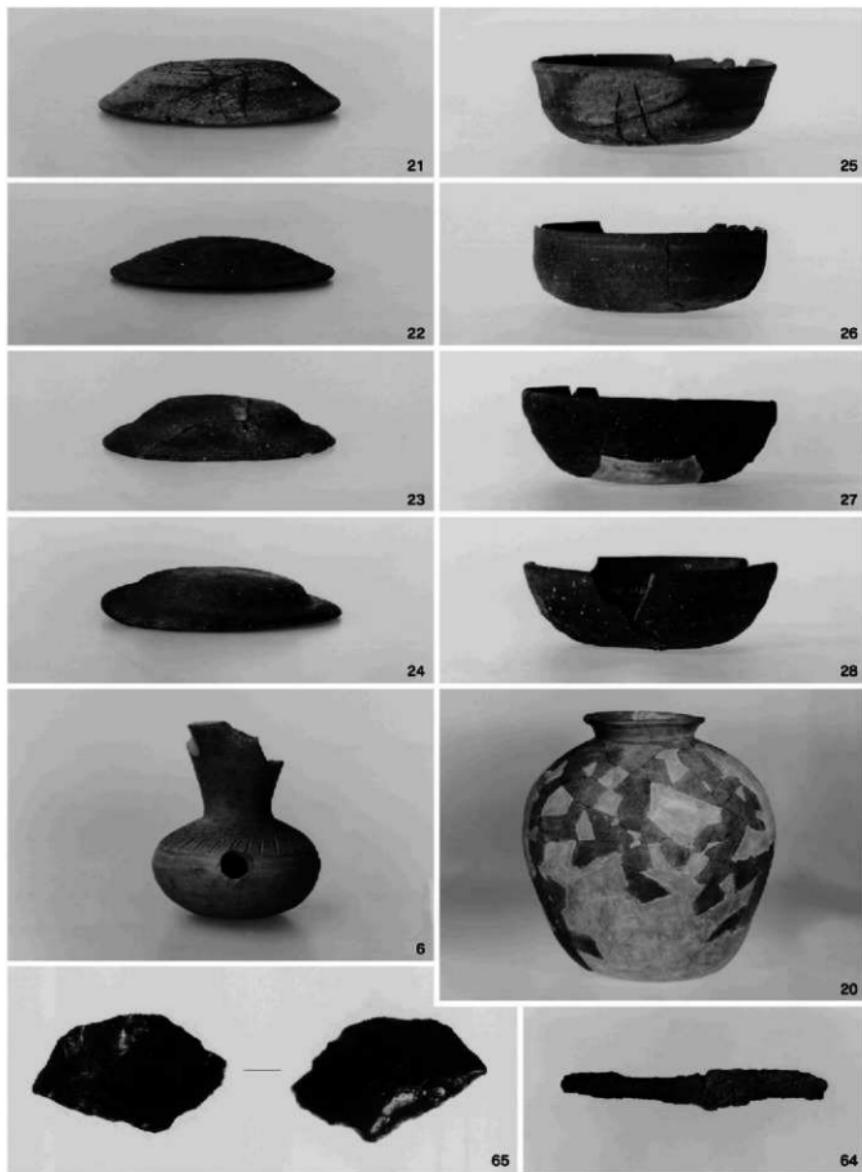
1 25次調査遠景（南から）



2 8号填地山整形（真上から）



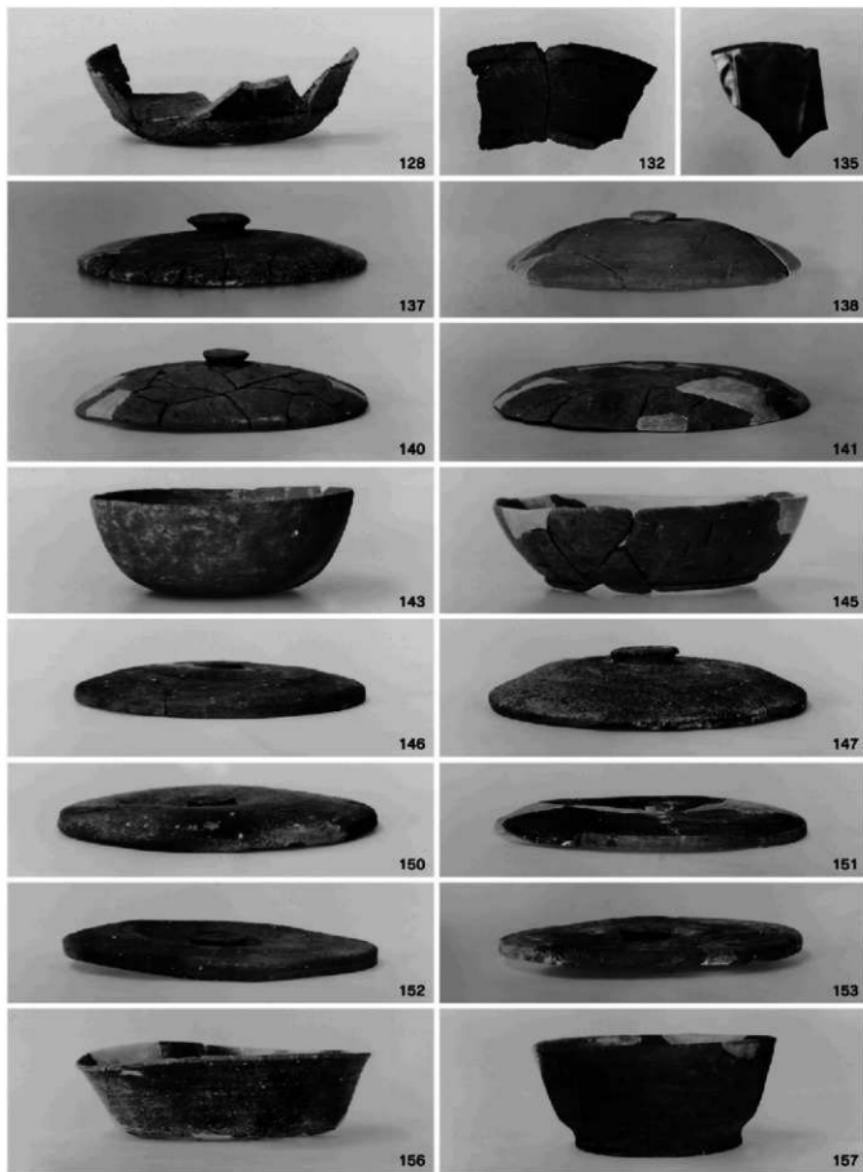
3 6・7・8号填地山整形（真上から）



出土遺物 I



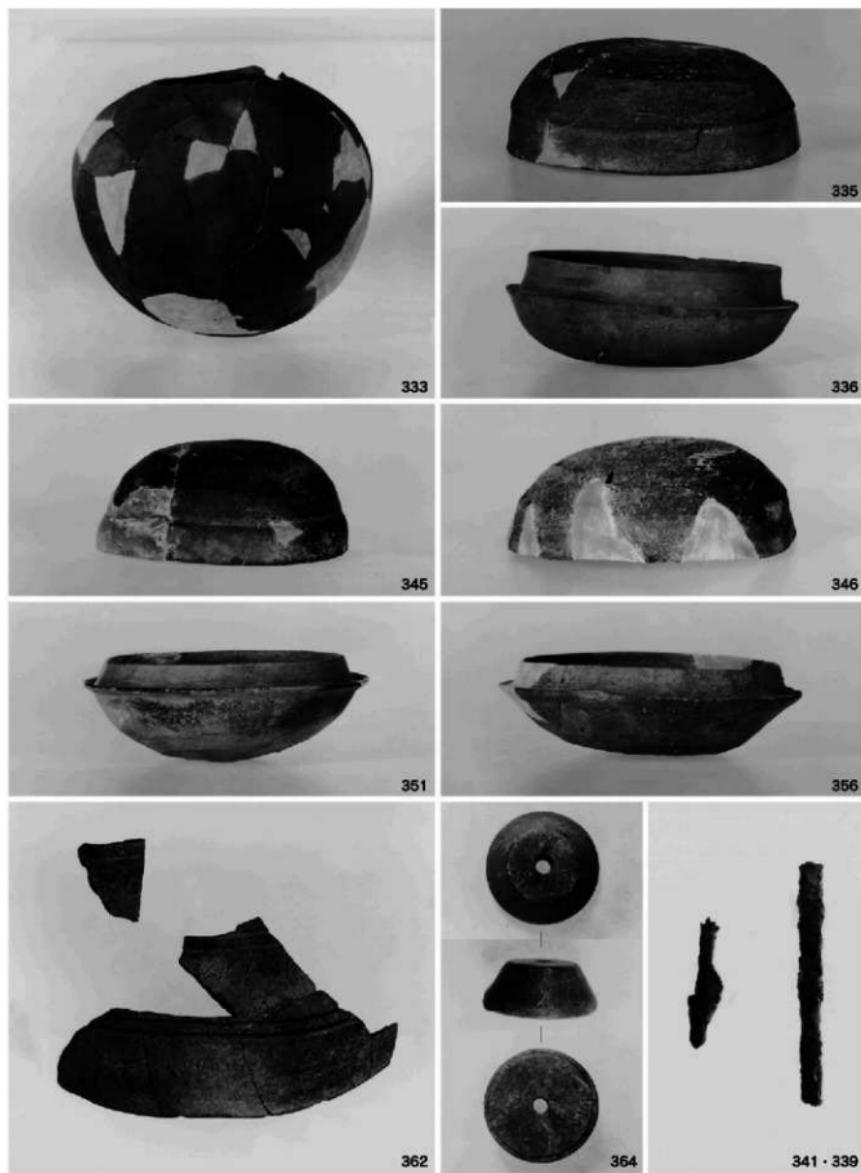
出土遺物 II

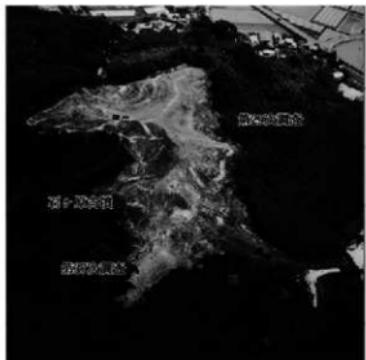






出土遺物 V





1 29次調査現況遠景（北から）



2 調査区東側全景（北から）



3 4～9号墳遠景（北から）



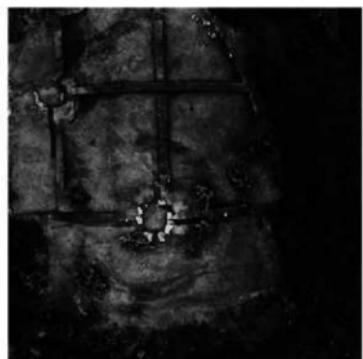
4 4～6号墳遠景（南東から）



5 石垣①～④検出状況（南から）



6 石垣①検出状況（南から）



1 1号墳全景（真上から）



2 1号墳現況（南から）



3 1号墳石室（東から）



4 1号墳石室検出状況（南から）



5 1号墳仕切石検出状況（東から）



6 1号墳石室床面（南から）



1 1号墳石室掘方（東から）



2 1号墳石室（南から）



3 1号墳閉塞石検出状況（東から）



4 1号墳閉塞石検出状況（西から）



5 1号墳Bトレンチ土層（南から）



6 1号墳Bトレンチ周溝部土層（南から）



1 1号墳石室遺物出土状況（西から）



2 1号墳刀子出土状況（南から）



3 2号墳全景（真上から）



4 2号墳現況（南から）



5 1・2号墳遠景（南から）



6 2号墳転石状況（西から）



1 2号墳閉塞石検出状況（南から）



2 2号墳石室（北から）



3 2号墳石室遺物出土状況（南東から）



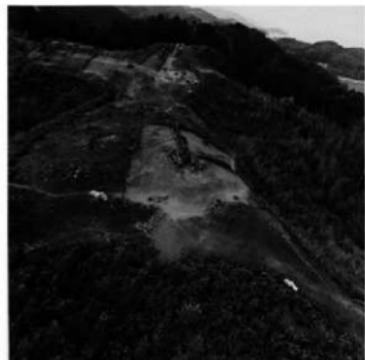
4 2号墳石室遺物出土状況（西から）



5 2号墳羨道部遺物出土状況（南から）



6 2号墳Bトレンチ土層（東から）



1 3号墳遠景（南から）



2 3号墳現況（南から）



3 3号墳全景（真上から）



4 3号墳墳丘現況（南東から）



5 3号墳玄室遺物出土状況（南から）



6 3号墳玄室奥壁側敷石（南から）



1 3号墳玄室左側壁（東から）



2 3号墳玄室右側壁（西から）



3 3号墳玄室遺物出土状況（東から）



4 3号墳玄室須恵器出土状況（南から）



5 3号墳玄室人骨出土状況（南から）



6 3号墳耳環出土状況（南から）



1 4号墳全景（真上から）



2 4号墳現況（東から）



3 4号墳転石状況（北から）



4 4号墳東斜面状況（南から）



5 4号墳須恵器出土状況（東から）



6 4号墳石室掘方（西から）



1 5号墳全景（真上から）



2 5号墳現況（南東から）



3 5号墳左側壁（東から）



4 5号墳石室（南から）



5 5号墳石室（南から）



6 5号墳奥壁（南東から）



1 6号墳全景（真上から）



2 6号墳現況（西から）



3 6号墳石室（東から）



4 6号墳玄室右側壁（西から）



5 6号墳玄室敷石検出状況（南から）



6 6号墳玄室奥壁（南から）



1 6号墳Cトレンチ土層（南から）



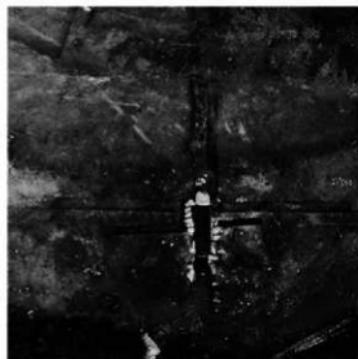
2 6号墳落石状況（南から）



3 7号墳遠景（西から）



4 7号墳現況（南から）



5 7号墳全景（真上から）



6 7号墳石室転石状況（西から）



1 7号墳石室（西から）



2 7号墳玄室奥壁（西から）



3 7号墳玄室左側壁（南から）



4 7号墳玄室右側壁（北から）



5 7号墳羨道左側壁（南から）



6 7号墳羨道右側壁（北から）



1 7号墳左袖石（南から）



2 7号墳玄室右隅角（北から）



3 7号墳石室掘方（東から）



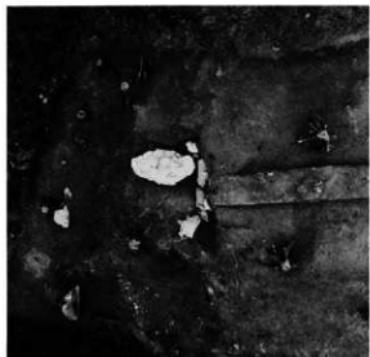
4 7号墳Cトレンチ土層（東から）



5 7号墳耳環出土状況（北から）



6 7号墳東側銅錢出土状況（東から）



1 8号墳全景（真上から）



2 8号墳現況（北から）



3 8号墳石室（東から）



4 8号墳石室掘方（東から）



5 8号墳石室（西から）



6 8号墳Cトレンチ土層（南から）



1 9号墳全景（真上から）



2 9号墳現況（西から）



3 9号墳石室（西から）



4 9号墳石室（西から）



5 9号墳石室（東から）



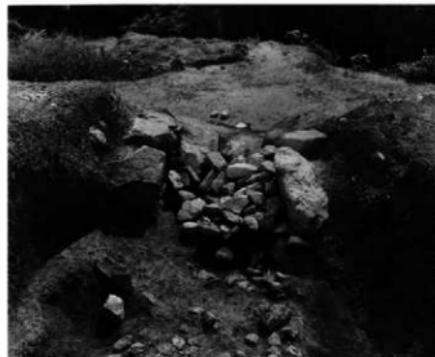
6 9号墳石室掘方（西から）



1 9号墳閉塞石転石状況（西から）



2 9号墳閉塞石転石状況（東から）



3 9号墳閉塞石検出状況（西から）



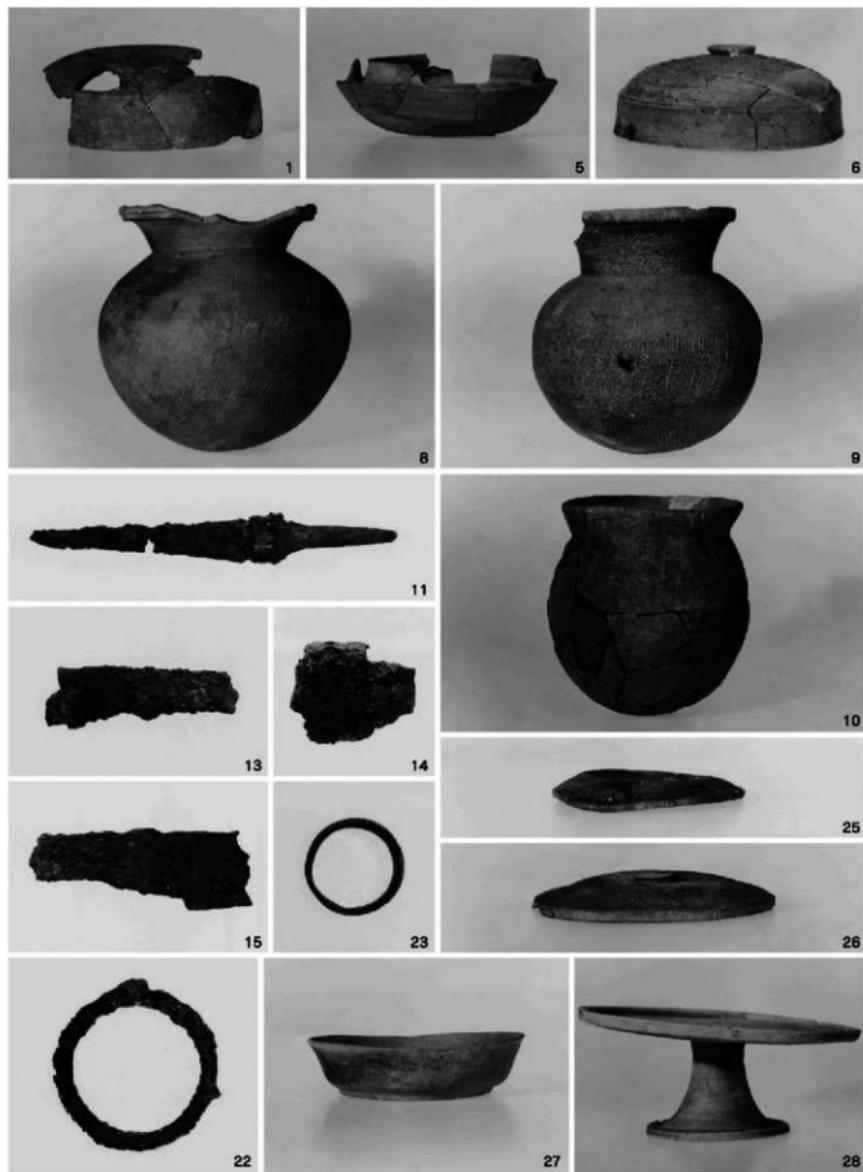
4 9号墳閉塞石検出状況（真上から）



5 9号墳Aトレンチ土層（西から）

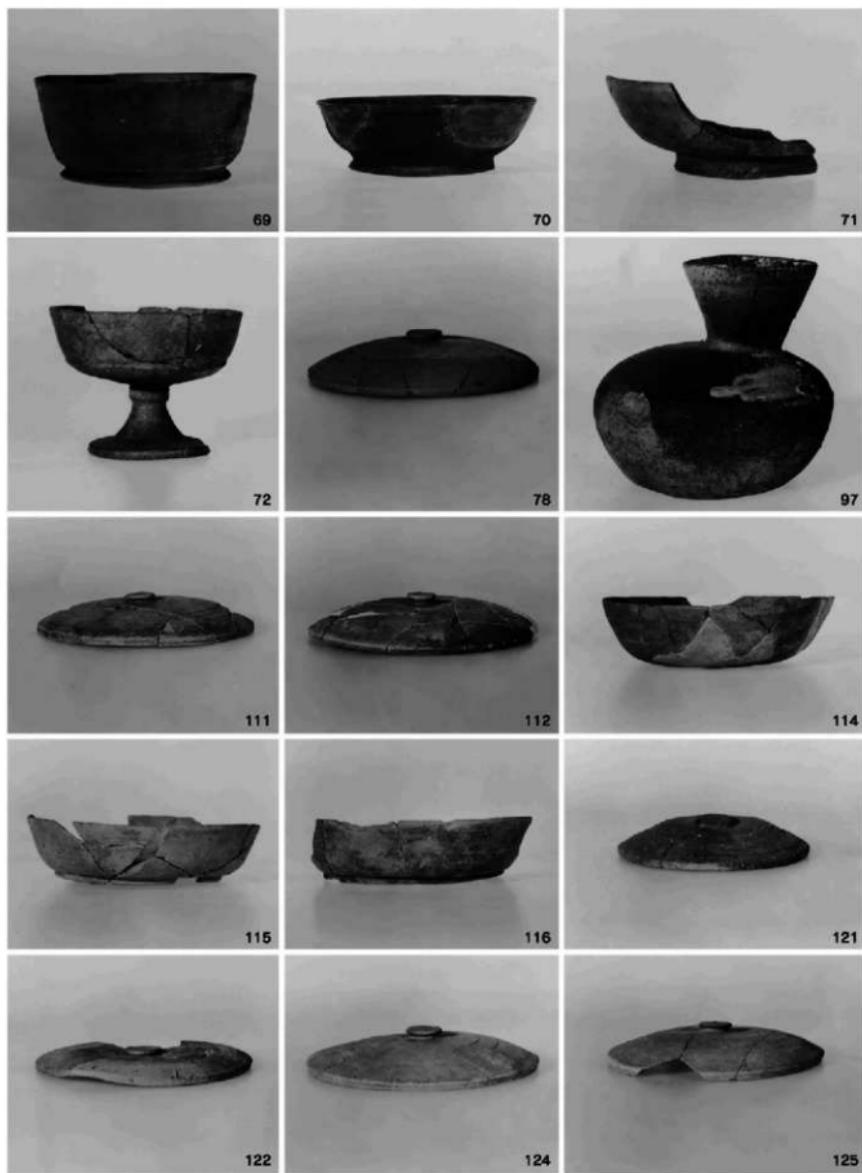


6 9号墳Cトレンチ土層（西から）

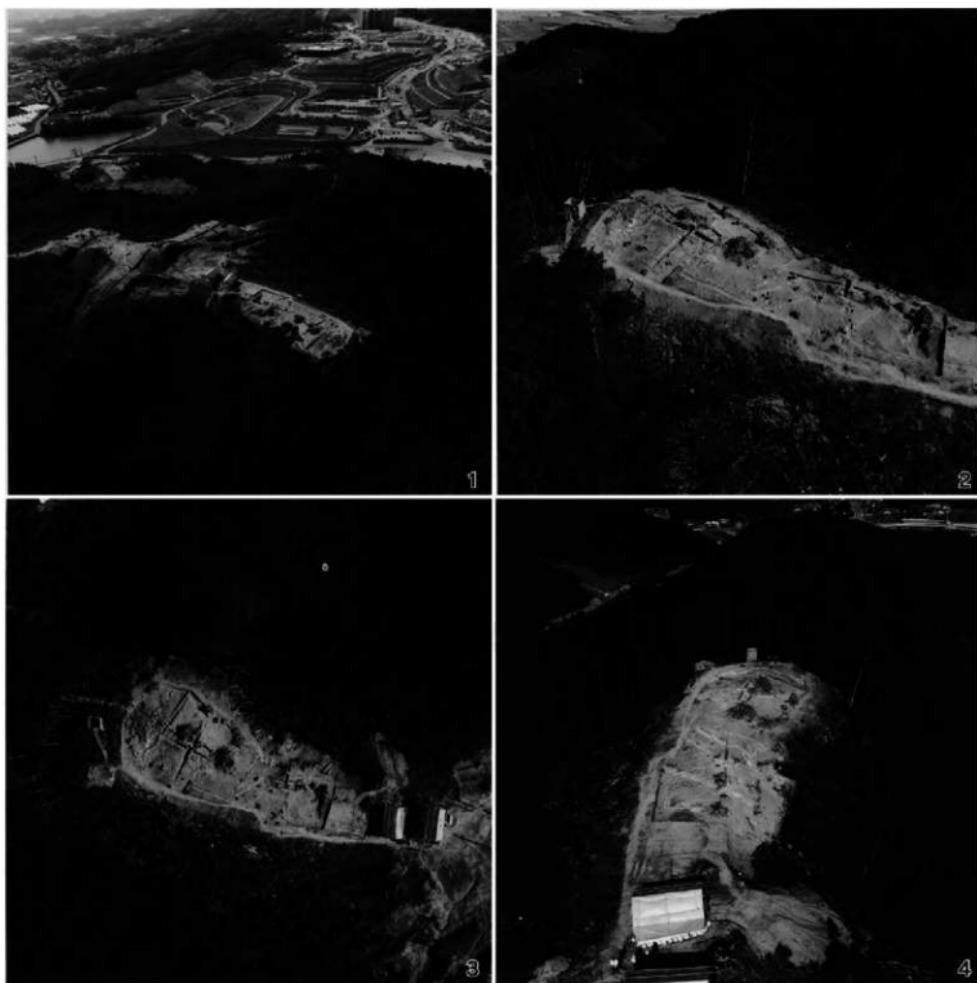


出土遺物 I



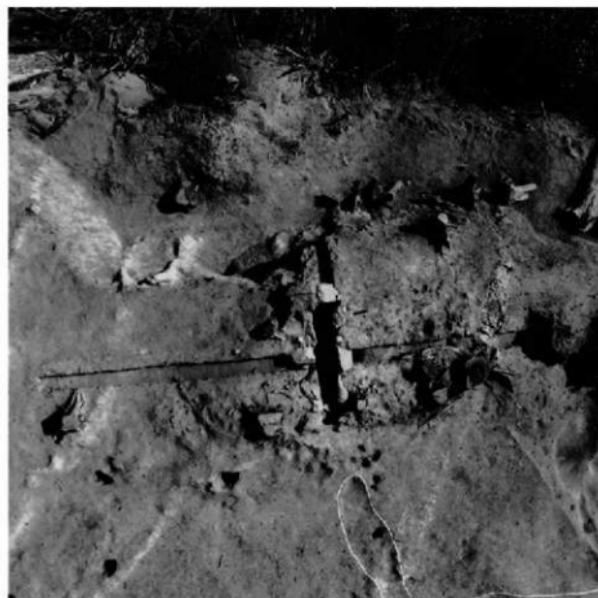






元岡古墳群O群全景

- 1 東上空から (中央右下がO群、中央左上は元岡石ヶ原古墳)  
2 西上空から 3 北上空から 4 南上空から



1 1号墳全景（西上空から）



2 2・3・4号墳全景  
(西上空から、右から2号、  
3号、4号)



1



2



3



4



5

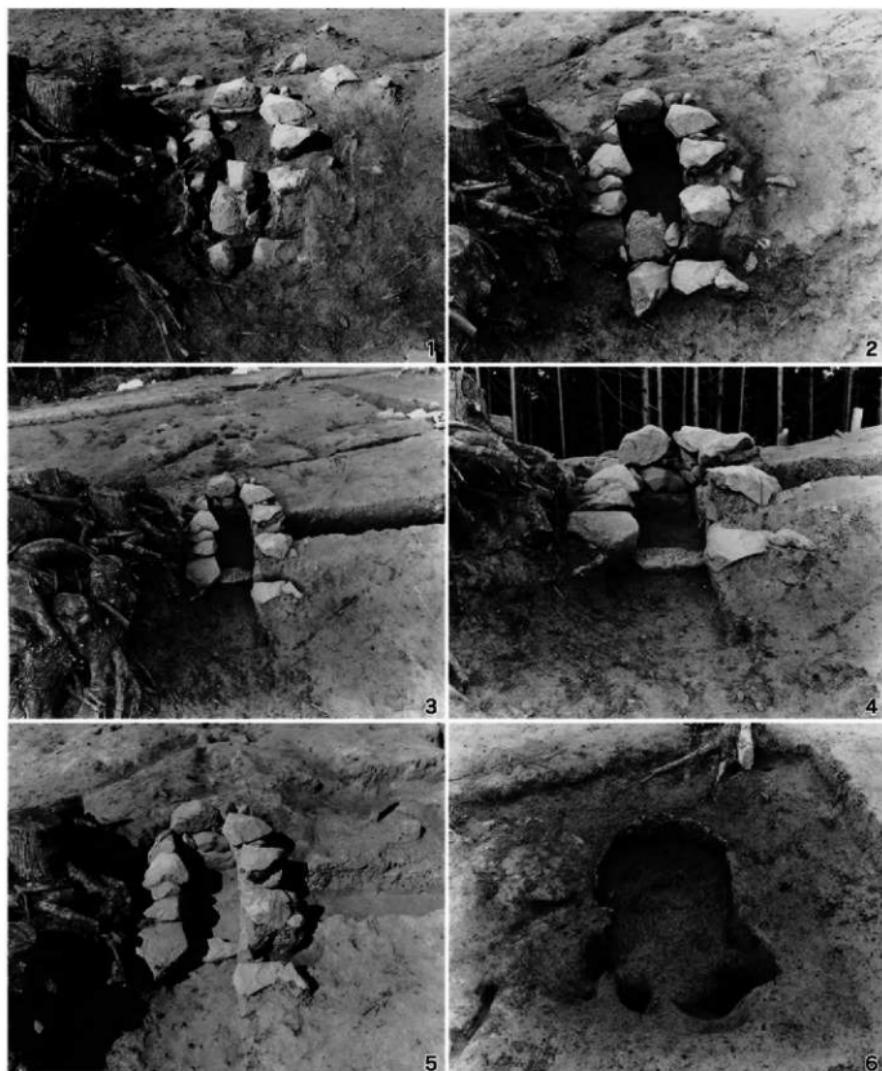


6

## 1号墳

- 1 検出時状況（西から）
- 3 墳丘遺存状況（西から）
- 5 石室（東から）

- 2 閉塞（西から）
- 4 石室（西から）
- 6 石室掘り方（西から）



1 2号墳検出時状況（東から）

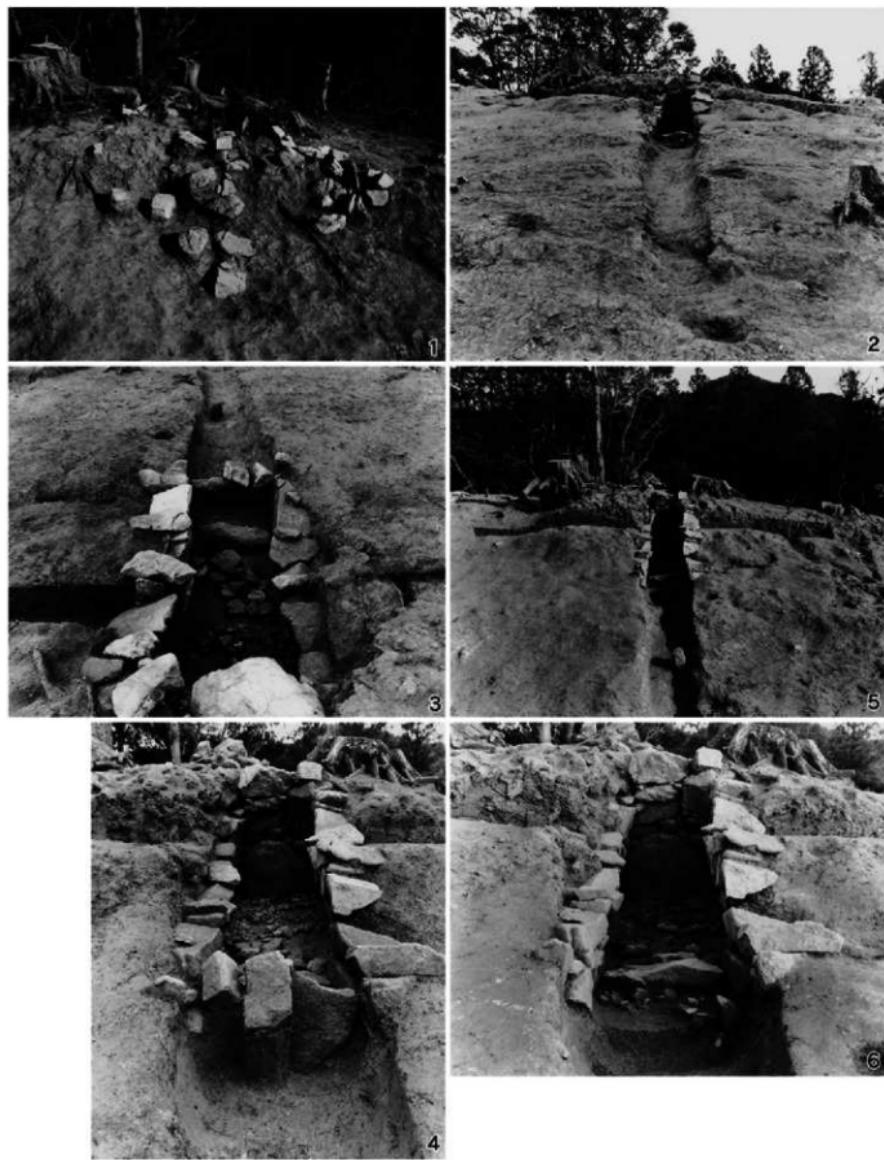
3 2号墳墳丘遺存状況（東から）

5 2号墳石室掘り方（東から）

2 2号墳閉塞（東から）

4 2号墳石室（東から）

6 1号焼土坑（東から）



3号墳

1 検出時状況（西から）

3 閉塞（東から）

5 墳丘遺存状況（西から）

2 墓道（西から）

4 閉塞（西から）

6 石室（西から）



1



2



3



4



5



6

## 3号墳

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 1 石室（西から）      | 2 石室内遺物出土状況（西から） |
| 3 石室内遺物状況（北から） | 4 石室内遺物出土状況（南から） |
| 5 石室掘り方（西から）   | 6 石室掘り方（南東から）    |



1



2



3



4



5



6

## 4号墳

1 検出時状況（西から）

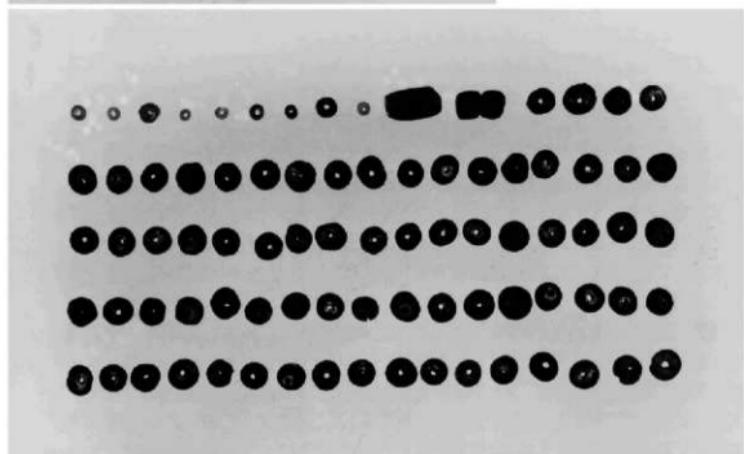
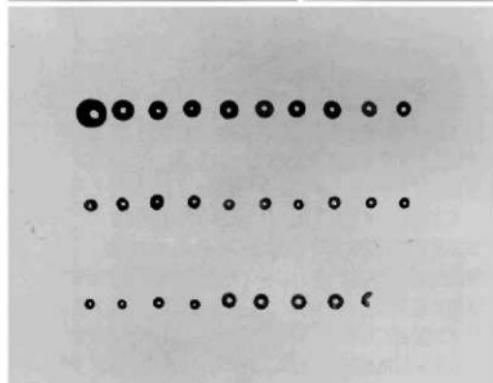
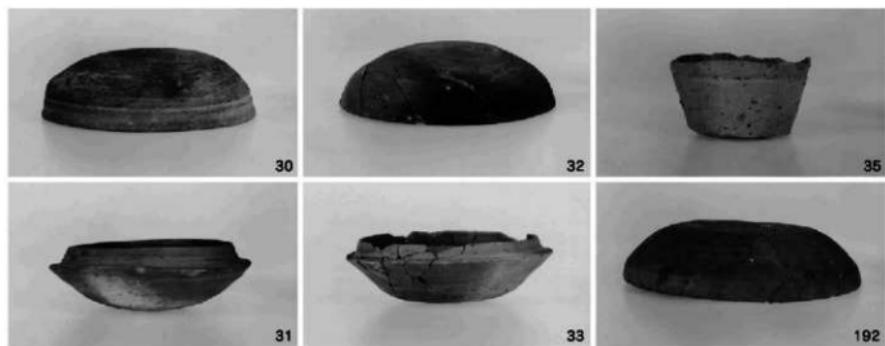
3 石室（西から）

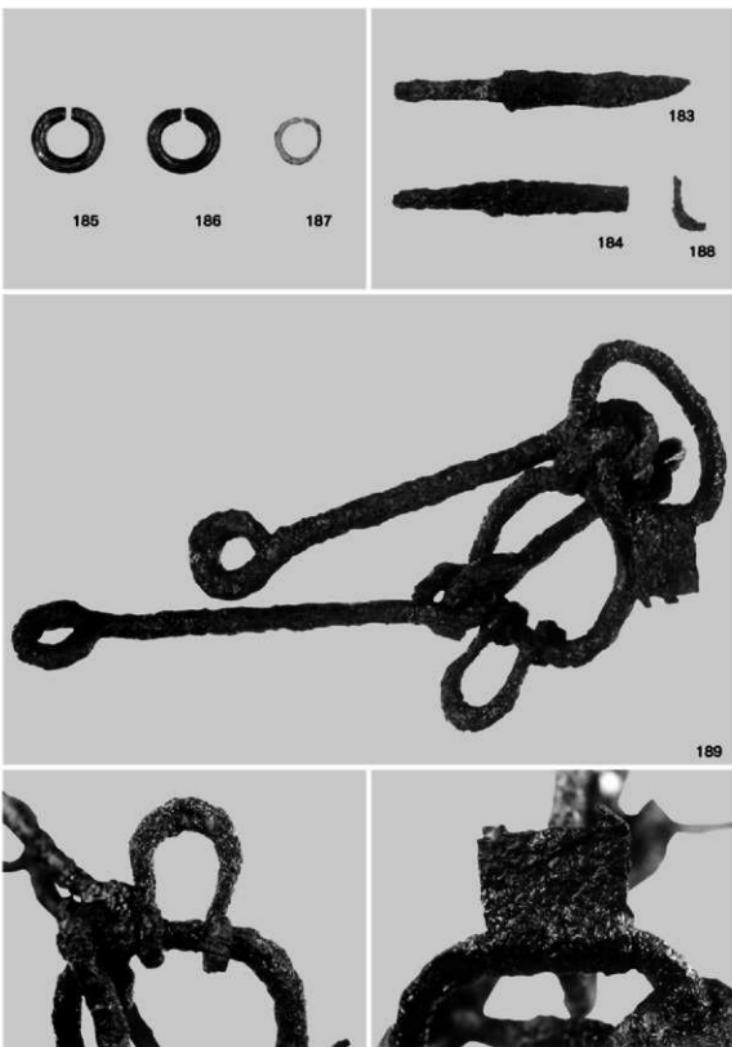
5 石室（東から）

2 墓丘遺存状況（西から）

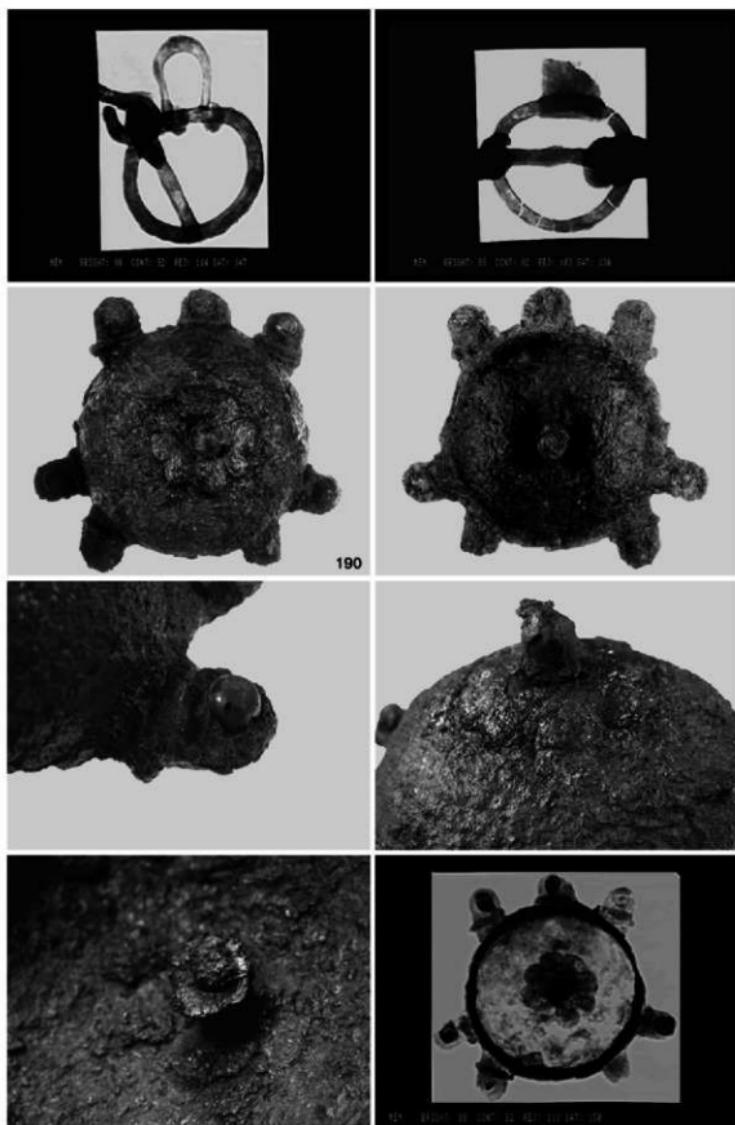
4 石室（西から）

6 石室掘り方（西から）





出土遺物 II



出土遺物Ⅲ

|         |  |                         |                           |
|---------|--|-------------------------|---------------------------|
| 書名ふりがな  | きゅうしゅうだいがくとうごういてんようちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ                              |                         |                           |
| 書名      | 九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書  |                         |                           |
| 副書名     | 元岡・桑原遺跡群5 -第13・17・25・29・37次調査の報告-                                      |                         |                           |
| 巻次      | 5  |                         |                           |
| シリーズ名   | 福岡市埋蔵文化財調査報告書  |                         |                           |
| シリーズ番号  | 第861集  |                         |                           |
| 編著者名    | 濱石哲也・星野恵美・松浦一之介・菅波正人   |                         |                           |
| 編集機関    | 福岡市教育委員会   |                         |                           |
| 発行機関    | 福岡市教育委員会   |                         |                           |
| 発行年月日   | 20050331   |                         |                           |
| 作成法人ID  |  |                         |                           |
| 郵便番号    | 810-0001   | 電話番号                    | 092-711-4667              |
| 住所      | 福岡市中央区天神1-8-1  |                         |                           |
| 遺跡名ふりがな | もとおか・くわばらいせきぐん   |                         |                           |
| 遺跡名     | 元岡・桑原遺跡群   |                         |                           |
| 所在地ふりがな | ふくおかにしくもとおか・くわばら   |                         |                           |
| 遺跡所在地   | 福岡市西区元岡・桑原   |                         |                           |
| 市町村コード  | 40135  | 遺跡番号                    | 2782                      |
| 北緯      | 333530   |                         |                           |
| 東緯      | 1301230  |                         |                           |
| 調査期間    | 第13次 1994.4.12~9.28  | 第17次 1999.9.10~12.8     |                           |
|         | 第25次 2000.12.11~2001.11.30   | 第29次 2002.4.5~2003.9.30 | 第37次 2003.10.20~2004.2.26 |
| 調査面積    | 第13次 古墳3基・第17次 古墳2基・第25次 古墳7基・第29次 古墳9基・第37次 古墳4基                      |                         |                           |
| 調査原因    | 大学移転   |                         |                           |
| 種別      | 古墳   |                         |                           |
| 主な時代    | 古墳時代   |                         |                           |
| 遺跡概要    | 第13次 前方後円墳1基、円墳2基  | 第17次 円墳2基               |                           |
|         | 第25次 円墳7基  | 第29次 円墳9基               | 第37次 円墳4基                 |
| 特記事項    | 第13次調査の前方後円墳より青銅鏡1面、第25次調査より鉄鋌と鉄金槌、第29次調査より「大道」刻書須恵器亮、第37次調査より馬具が出土する。 |                         |                           |

福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集  
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群5  
-第13・17・25・29・37次調査の報告-

2005年3月31日

発行 福岡市教育委員会

(福岡市中央区天神1-8-1)

印刷 川辺印刷有限公司

(福岡市南区高宮1丁目7-19)

